アルティメットヒューマン

二階藤

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
アルティメットヒューマン

【Ｎコード】
Ｎ０４７５Ｃ

【作者名】
二階藤

【あらすじ】
アンブレラが極秘裏に、特殊な生物兵器を行っている孤島…ある晩、生物兵器が暴走する事件がおき、その孤島の研究員達は…。

プロローグ1（前書き）

登場する人物の一部は、実際にゲーム内にも登場する人物ですが、台詞の言い回しや、役職などについては、作者による創作です。
また、ゲーム中の内容に触れる部分もあるため、ゲーム本編未プレイの方はご注意いただけますようお願いいたします。
（主に、バイオハザード1～3、コードベロニカ、ガンサバイバーなどです）

この小説は、バイオハザードの小説を募集していた際に、作者である「二階堂（当時は別のＰＮでしたが…）」が実際に書いた、小説を一部加筆、修正を行って、連載形式にて、投稿させて頂きますのでよろしくお願いします。

プロローグ1

…ピーピーピー
通信機の鳴り響く音が聞こえる。
俺は通信機を手に取り受信のスイッチを押した。通信機の先では、頼りになる仲間がその受信を待っているはずだ。
待たせまいとして、早めに出たつもりだったのだが、通信機の先では、
「出るのが遅かったじゃないか？…何かトラブルでもあったのか、クリス」
と、心配そうに聞いてきた…トラブルなんかがあるわけがない。
しかし、からかうのもおもしろいと思いちょっとしたジョークをいってみても罪にはならないだろうと、
「ああ、ちょっとしたトラブルがあってな…」
「トラブルって何があったんだ？」
と、驚き混じりに聞いてきた。…さすがにこのままではいけないな…冗談だったことを伝えるとするか。
「実はな…少しだけなんだが…」
と、そこでわざと言葉を止めた。
「少しだけ！？…いったい何があったんだ？」
更に驚いたように聞いて来た。
「寝ちまってたんだ」
と、笑い混じりに答えた。
さすがに、頭にきたのか、通信機の先で、ため息混じりに、
「冗談もいいが…とりあえず俺の聞きたいことはわかっているよな？」
と、それだけいってきた。
これ以上冗談を言っていても意味がないな…俺は、その聞きたいであろうことに答えることにした。

「妹を…クレアを無事に救出することができたかだろ、バリー？」
俺は、バリーにそう答えた。
「…クリス、それは、聞かなくともわかる…お前がヘマをするようには思えんからな」
「俺も信頼されているんだな…じゃあ、お前が聞きたかったこととというのは…」
「…アンブレラの事だ…」
…アンブレラ、か。
…大手の製薬会社の為、その名前を知らないものはいないだろうな…。
しかし、大手の製薬会社という肩書きは表向きであって、その裏ではかなりやばい事をしている。
…危険なウィルスの研究に始まり、その他、生物兵器の開発とかもしている。
ウィルスの効果は絶大で、死んでいる人間ですら蘇り動き出すだすということなのだ。
…つまり、このウィルスに感染してしまったものは生きる屍、ゾンビとしてとして蘇るという事になる。
更に、厄介なことに、このゾンビに噛まれた人間は、徐々に全身がウィルスに蝕まれ、健常な人間だったとしても、ゾンビとなってしまう…。

「やはり…アンブレラが関係していた様だ。…クレアの話によれば、あの洋館や、ラクーンシティにはいなかった、新たな生物兵器もいる様だ」
「他にも、化け物を作ったということか…他に何かあったか？」
「…あぁ、新しいウィルスの存在を確認した」
「新しいウィルスだって？…それは、今、調査中のGーウィルスとは別のものであると見ていいのか？」

…確かな資料もあったし、実際にそのウィルスを自身に使って、生物兵器となった者とも戦ったので、その事実に間違はいなかった…。
「…恐らく、G－ウィルス別のものと見た方がいいだろう…実際に、その研究所にあった資料にも目を通したが、開発した人間自身が実験体になっている」
「…開発者が…実験体に？」
「あぁ…このウィルスの開発者は、かなり賢い人間だったようだが…どうやら人為的に作られただった人間らしい」
と、俺は返答した。バリーは、
「…そうか、じゃあ他に変わった事はあったのか？…例えば、あの洋館にいたタイラントとか言う化け物の進化したやつとか…な？」
今度は、バリーが冗談混じりに言ってきた。
「…どうやら、いたらしい」
とだけ答えた。
俺は、実際にそのタイラントと思われる化け物とは、戦ってもいないし、見たわけでもない。
だが、クレアがその化け物と戦い、辛くも撃退することが出来たという話を聞いたからだ。
実際、クレアは、ラクーンシティで、タイラントの改良型とも言える化け物と戦っている…そのクレアからの情報だから疑う余地もなかった。
やはり、その突然の返答にバリーも驚いたらしく、
「いた…らしい？…それは、どういう事だ？」
「…そのタイラントを見たのは、クレアだ…俺が実際に見たわけでないからどんな姿をした化け物かは想像できない…それにクレアも、ラクーンシティで戦っている…」
「そういえば…そうだったな」
「…いえる事があるとするならば、洋館の時や、ラクーンシティの時よりも、進化をしているという事だけだ…知能までも発達してきているらしいしな」

自分の考えなども含みながら言った。
そして、このまま通信機で話を続けるよりも、研究所から持ち出した資料を見せた方が早いと考え、
「今回の事件の関連の資料があるから、とりあえずそっちに向かう事にする。…最後にもう一つあるんだが…いや、何でもない」
と、そこで言葉を止めた…あまりにも衝撃的事実でもあるし、この通信が何者かに傍受されているかもわからない。
そんな考えが働き、バリー達に会うまで伏せておく事にした。
「…何でもないって、何でもなくはないだろう？」
「…会ってから話す」
「…わかった。じゃあ通信を切るぞ」
こちらの考えを悟ってくれたのか、あっさりと返答をして、バリーとの通信が途絶えた。

プロローグ2

…通信を切ってからすぐに待ち合わせの場所に向かう事にした。待ち合わせの場所は、ラクーンシティーのあったところからは、そう離れていないところであった…そこに集まるのには訳があった。そこには、これから向かおうとしているアンブレラの研究所に関する重要な秘密が発見されたからしいのだ。

どんな秘密かはまだ聞かされていないのだが、バリーは、かなり重要であると踏んでいるようだ。実際、俺たちは、どんな小さな情報であっても調査する事を惜しみなく続けるべきである状況下にある事は間違いがなかっが、アンブレラの壊滅をもくろんでいるわけではない。

アンブレラが壊滅したならば、また別の組織が別の形で表舞台に出てくる可能性もある。最悪の場合、世界大戦規模の戦争も起こりかねない。

正義のためではない。しかし、俺たちは、人間の能力の限界を越えている何者かの世界を垣間見てしまっている。何としてでもこの事実を解明するという使命があるような気がしてならなかった。他人から見れば、それはただの妄想にしか見えなくても仕方のない事でもあった。それでも、俺はそれをやらなければならないような気がしたのだった。

…洋館での出来事、できるのならば思い出したくはない。あんな事さえなければ俺は、いや、俺たちはこんな事に巻き込まれはしなかったはずだ。全ては、近郊にある洋館から集団で人間を襲い、そして喰ってしまうという異常な事件の通報から始まった。もちろん、こんな異常な事件が起こってしまったという事だったので、俺たち特殊操作部隊である、S・T・A・R・Sの出番となる。S・T・A・R・Sは、二つのチームに別れており、俺やバリーがいた方の

チーム名がａ（アルファー）チームといい、もう一方のチーム名をｂ（ブラボー）チームといった。この事件に関しては、先にｂチームの方が調査に乗り出したのだが、突如として、通信がとだえてしまう。通信のとだえてしまったｂチームの捜索をするために俺たちａチームも出動する事になったのだった。
ｂチームの捜索中に得体の知れない化け物に襲われてしまい、我々ａチームは逃げる事になった。前方に洋館が見えたので、その洋館に退避する事にした。
見たところ立派な洋館だったのだが、住民は見当たらなかった。俺たちは、ｂチームの隊員もここにいるだろうと思い、調査をする事にした。
調査していると、ｂチームの隊員は、その多くが得体の知れない化け物に襲われてほぼ全滅の状態である事がわかった。ｂチームで生存を確認する事ができたのは、新人のレベッカと副隊長のエンリコだけだった。しかし、エンリコは負傷していて動く事はできなかったようだった。
この洋館では、異常な事が多過ぎた、異常に大きくなった毒蛇の化け物や、植物の化け物、そのほかにも多数いた。見た事のない化け物もいた。
しかし、調査を進めていくと、ｂチームのエンリコをジルが見つけて会話をしたらしいのだが、エンリコが妙な事をいっていたらしい。『隊の中に裏切り者がいる。』と、言ったらしい。その正体は、そのあとすぐにわかる事になった。エンリコは、このジルとの会話を最後に、何者かに銃によって射殺されてしまう。
それは、この洋館に来てから、異常な行動の多いバリーであると思ったのだが、それはただ操られているだけに過ぎなかった。本当の裏切り者は、隊長のウェスカーだった。
ジルは、このウェスカーに操られているバリーによってある研究室の前まで連れ行かされた。もちろん、それはごく自然な形でだった。その後、バリーは、地上で待機しろというウェスカーの指示通りに

動いた。何故、バリーがウェスカーの命令通りに動いたかという理由は、家族を人質に取られてしまっていたからだ、人一倍人情に厚く、家族思いのバリーにとっては、命令に従うしかなかったのだった。ジルを裏切ってしまって、うちひしがれているバリーを見て、ジルをすぐ助けに行くべきだと諭しただけでも、勇気づける事ができたのも、バリーが正義感の強い人間であるからだと思った。ところが、そうこうしているうちに、ジルの方では別の動きがあった。ウェスカーは、タイラントという、アンブレラの生物兵器によってできた究極の生命体をジルに見せると言って、実験室に入れた。いや、見せるというよりは、実験体にジルを使うと言った方が正だろう。ウェスカーは、この究極の生物とやらを自分のものとし、アンブレラの対立企業に身売りしようとしていたらしい。

化け物を動かしたウェスカーは、ジルを襲わせるつもりだったようなのだが、その化け物は、ウェスカーを殺してしまった。…だが、これは、後の別の事件の際にわかったのだが、ウェスカーは、わざと自分自身を襲わせたらしい。つまり、ウェスカーは生きていたのだ。この事は、あまりに衝撃的過ぎてバリーには言えなかったが、合流した際に言っておかなくてはならない事だろう。もちろん、もう一つの事も…。

ウェスカーを殺し終わった後は、もう一人の人間つまり、ジルを殺そうとジルに襲いかかるが、ジルは、手持ちの武器でタイラントの撃退に成功した。バリーは、実験室の入口が閉まっていたので、中には入れず、入口のところで、ジルの無事を祈りつつ出てくるのをまっていたそうだ。無事、ジルが出てくると、ジルに謝罪をして、再び援護をする事にさせてもらったそうだ。

この研究所と洋館は、このままにしておくわけに行かない。何とかしないといけないと思ったのだが、良い方法が思いつかなかったのだが、レベッカのアイディア動力室にあった起爆装置を作動させて、研究所ごと爆破させてしまう事にした。俺たちは、すぐにヘリポートへと向かった。上空で、隊員のブラッドが待機しているという通

信がはいってきたので、早く合図をしなくてはと思い、急いで向かった。
ヘリポートにつき、合図に使えそうな信号弾を見つけてそれを打ち上げた。脱出できると思った刹那、タイラントが床を破って、ヘリポートに上がってきたのである。ジルとの戦いでの傷はすでに完治しているらしく、より強力な肉体をもってやってきたらしい。銃が全く役に立たなかった。半ばあきらめていた時、ヘリから武器が落とされた。
「クリス、そいつを使え！化け物にぶちかましてやれ！」
という、ブラッドからの通信が聞こえた。その落とした武器というのは、四連装のロケットランチャーだった。それを拾いに走るが、タイラントが邪魔して思うように動けない。何とか拾えたが、タイラントの鋭い爪が俺の体を吹き飛ばした。しかし、その攻撃で、ちょうど良い距離をとることができた。態勢を立て直して、タイラントに標準をあわせて、ロケットランチャーの引き金を引いた。ロケット弾が発射されて、タイラントに着弾すると同時に、タイラントを爆破して破壊する事に成功した。そして、バリーとレベッカ、そして、ジルがヘリポートへと上がってきた。そして、無事に脱出することができたのだった・・・。

しかし、洋館でおきた事件は、誰に話しても、信用される事はなかった。正確に言うならば、ラクーンシティは、アンブレラによって成り立っているところがあるので、アンブレラに対するあらゆる事は、たとえ信憑性があったとしても、声を大にしてアンブレラを叩くことができない。というような、暗黙の了解があったのである。少なくとも、そのような事をする人間は、ラクーンシティにはいない…そう言っても過言ではないのである。
…そんな企業を叩くという事は、ある意味では、ある一つの国と戦う事ほど無謀な事であるのである。だから、今は少しでも多くのアンブレラの情報が必要なのである。現在まで調べられている事は、

ラクーンシティにＴ－ウィルスを蔓延させてしまい、結果ラクーンシティという街を一つ地図上から消してしまっている。そのほかにはも、シーナ島と呼ばれる島にＴ－ウィルスを蔓延させ、その島の住民をほぼ全滅に追い込んでしまっている。　そして、これからバリーと合流した後に向かおうとしているのは、アンブレラの生物兵器の研究所なのだが、この研究所の生物兵器には知能があり、言語を操ることができるらしいのだ。これは、反アンブレラをかかげる組織にいる知り合いから得た情報で、間違いないであろうと思い、そこに向かう事にしたのだった・・・。

人語を話すハンター

…ピーピーピー
アンブレラの本社の方から支給された目覚ましの音がする。
今日もまた、いつも通りの一日が始まるのか…。
起き上がらない事にはなにもできないので、俺はもう少し寝たいという欲望をかなえることなく起き上がった。
「さて、準備をして研究所に向かうとするか…」
手早く準備をすますと、いつもの通路を通って研究所へと歩き出した。

研究所に着いた時には、遅刻ぎりぎりの時間となっていたので少し慌てたが、何の事はない。俺と同じ時間に入ってくる奴の方が多いくらいだ。
ここの研究所は、時間よりも若干遅く行動をする事も、許容範囲のなかに入っているのだ。
これは、時間厳守で縛る事よりも、多少遅くとも、規制を緩める事によって、研究員のリラックスや、心のゆとりを促し、研究により良い反映をさせようという計らいからだ。確かに、その甲斐もあってか、ここの研究所での研究は目を見張るものがある。
生物兵器に人間並みの知能を持たせる事を目標に、日増しに生物兵器の知能を上げてきているのだ。
今日は、生物兵器の知能をよりあげるために、少し前から計画されていたことが実地され始める日だ。
その計画というのは、研究員一人一人に、生物兵器との共同生活をするという事なのだ。
そうする事により、生物兵器と研究員との間に信頼関係を築き上げる事ができ、また、より広い知識の発達へとつながる事を狙っての計画なのである。

この計画の原案者というのは俺だったのだが、俺の考えていたものとは大分違うものとなっていた。
俺の考えでは、研究員一人一人ではなく、一部の研究員数名にこの計画を告げて共同生活ではなく、研究のパートナーとして生活をするというものだったのだが、
よりよい方向へと向かったのよしとする事にした。
今回の計画で各研究員に任せられる生物兵器というのは、比較的知能も高く、生物兵器の中でもある意味で、完成段階に近い、「ハンター」と呼ばれる生物兵器だった。
ハンターの特徴は、知能が高いだけではなく、仲間同士どの連携がうまく、二体以上で獲物を仕留めるというまさに理想的な生物兵器だ。
今回の計画では、ハンターに、簡単な機械の操作を始めとして、研究所を自由に行き来できるように教える事と、緊急時には、速やかに対処できるように、各種のシュミュレートをする事である。
ちなみに今回の計画に使われるハンターには、すでにプロタイプ以上の知識を有しており、ある程度の自我ある上に、簡単なことばなら扱う事もできるので、ある程度までなら会話をする事もできるように改良されている。
この言語能力の向上も今回の計画の一部である。もちろんこの計画には危険が伴うので、自主参加的なところもある。
では、何故、研究員のほぼ全員にこのことを通知したかというのは、この計画によって通路を普通にハンターが通る事になるために起こるであろう混乱を避けるためである。
今回の計画で、参加を決めたものは、研究員の三分の一程度に過ぎなかったのは、初の試みにしては多い方であると思った。もちろん、俺はこの計画の原案を考えたものとして参加する事にした。
「あんたが、俺の担当の人かい？」
と、ハンターが俺に聞いてきた。ハンターが普通に話しかけてきたので少し驚いたものの、俺は、

「ああ、俺がお前の担当の、ウィリアム＝R＝クーパーだ」
と、とりあえず名前だけつげた。すると、ハンターは、
「そうかい、ウィリアムって言うのか、よろしく頼むぜ、ウィリアム！」
と、威勢よくいった後に、
「ところで、ウィリアムの役職はなんだい？パートナーとしては聞いておきたいと思ってね。問題なければ教えてくれないかい？」
と、陽気に聞いてきた。報告では簡単な言語といっていた割りには結構色々なことばを知っているようであると、感心しながらも、
「一応、研究チームB班のリーダーをやっているよ」
と、簡単に答えた、この研究所では、生物兵器を主に改良する班と、新しい生物兵器の開発をしている班がある。
どちらも五班ずつあり、改良班の方は、大文字のアルファベット分けられており、開発班の方は、小文字のアルファベット分けられている。
つまり、俺は改良班という事になるのだ。
「リーダーとはすごいな。じゃあ、あらためてよろしく頼むぜ、リーダー」
と、また陽気にいってきた。こいつとならうまく行きそうだなと思いながら、
「ああ、よろしく頼む」
と、ハンターに言った。
しかし、ハンターという呼び方では話しにくくなりそうだと思い、
「そういえば、お前の事は何と呼べばいいんだ？ハンターじゃ少し呼びにくい感じもするし、何よりパートナーらしくないような気もするしな」
と、俺は尋ねた。
「ああ、それもそうだよな。そうだな…別に何と呼ばれてもいいんだよな。なぁ、ウィリアム、お前が呼ぶ名前を決めてくれないか？」
と、逆に頼まれてしまった。俺は、

「そうだな…東洋のことばで炎の意味を表す『エン』、という名前はどうだろう？気にいらなければ別に考えてもいいが、どうだ？」
と、尋ねた。
「『エン』か…悪くないな。いや、むしろ気に入った。よし、今度から俺の事は『エン』と呼んでくれ」
と、どうやら名前を気に入ってくれたらしく、一安心した。

前兆

さて、次にやる事に移るとするか…簡単に言えば、パートナーに研究所のなかの主な施設や、その施設の目的や使い方を教えてまわるだけだ。
もちろん、ある程度までは教えられているのが、実際に見るとでは全然違う…だから、当然の事であるといえる。
まずは、培養室へと向かった。
ここでは、生物兵器の開発や、改良、及び生物兵器の治療等をするところだ。
もっとも、治療っていうのは、滅多にすることがない。
何故なら、生物兵器自体の身体の代謝は、常人よりもはるかに高い…たとえば、銃で撃たれたとしても、ダメージはあるが、傷はすぐに閉じてしまう。
そのため、瀕死に近いダメージを受けない限り治療をする事はない。

次に行ったのは、リフレッシュルーム。
ここは、研究員達の事を考えて作られた部屋で、くつろげる空間に観葉植物等を置き、飲み物も飲めるようになっている。
このような部屋がある理由は、さっきも言ったように研究員に革命的で、斬新なアイディアを出してもらうためだ。
確かにここにくれば、気持ちも安らぐし、何よりもゆっくりと休憩することができる。
また、放送などによって研究員が呼ばれることはなく、必要な用件がある時は、各自に支給されている小型情報端末に直接送るようにすることになっている。
この情報端末には、各自がカスタムすることが容易にできるようになっているため、色々改良して、より使いやすくしている…俺もそうしているしな。

次は、セキュリティールームの前を通って簡単に説明をした後に食堂に向かうことにした。
セキュリティールームには、警備室もあり、警備員は、生物兵器の中でも特に研究の進んでいる「タイラント」である。
命令を忠実にこなせるという点ではうってつけだ。
もちろん、タイラントも言語を操ることができるので、世間話程度に、ここを訪れる研究員もいるほどだ。
タイラント一体でも、普通の警備員の数十倍の価値がある…これ以上のメリットはそうそうないだろうな…。

食堂では、完全にセルフサービス化されている。
これには、どんな些細なことでも自分で率先的にやることにより、自分の意見なども率先的に述べられるようにするためとのことだ…。
この研究所では平等が基本なので、肩書きは余り効力を持たない…先輩、後輩というような上下関係は、個人のレベルで判断されることになっている。

一通りの案内も終わった頃には、今日も一日終わりそうになっていて、最後に、パートナーのエンを俺の部屋まで案内することになった。
計画の参加者は、部屋が若干広いところに移るため、荷物を移動しなければならない…まぁ、広いところに移るのはありがたいのだが…。
ここの研究所では、いつでも移動することができるようにしておくことが暗黙の了解とされている。
というのも、プロジェクト毎に宿舎を移動することを言い渡され、それに、すぐに対応しなければならないからだ。
実際、俺は、この研究所に勤務するようになってから、実に、五回目の移動だ…流石に、もう大分なれてきたがな…。

部屋に戻り、既にコンパクトにまとめてある荷物を二つに分けてエンと一緒に持っていくことにした。
「エン、悪いがこの荷物を運ぶのを手伝ってくれ」
「マジかよ！？…てか、ウィリアムの持っている方が少なく感じるんだけどよぉ、一体それはどうゆう事なんだよ？」
「気のせいだって。新しい部屋に着いたらゆっくり休めるんだから、頼むよ」
「しょうがねぇなぁ。部屋に着いたら、何かくれるんだろうな？」
要求を出しながらも、エンは、運ぶ事を手伝い始めてくれた。
部屋の移動も無事終わり、食事をとった後、部屋に戻りエンと、今後の話をしている時だった。

ビーッ！ビーッ！ビーッ！

「緊急事態が発生しました、研究員は、速やかに対処して下さい」と、いう放送が入った。
ただ事では無いと思い、放送で警告していた発生現場へとエンと一緒に向かう。
そこには、アレル博士と、同僚のジョンソン、そして、俺を先輩視しているジャンがすでについていた。
「一体何があったんだ？」
「…開発中の生物兵器が暴走を起こしてしまったらしい。今、タイラントが交戦してこれを抑えようとしているのだが…どうも苦戦しているらしいな」
ジョンソンは答えた。
こいつは、入社時に知りあったのだが、どんな状況でも冷静に対処できる能力を買われて、すぐにここの研究所に移った。
俺は、その二年後にアイディアの斬新さと、発想力を買われて同様

に移る事になり、こいつと再会することになった。
「よし、私が加勢しに行ってこよう」
アレル博士が中に入っていった。
博士といっても、かなりの肉体派であり、いつも脇には、日本の職人に作ってもらった、刀を携帯してる。
切れ味はかなりのもので、生物兵器の身体ですら容易に切れてしまうほどだ。
彼の事を、ファーストネームで呼ぶ人間は、この研究所にはいない。
大体が、アレル博士と呼んでいる…当の本人も、そう呼ばれることを望んでいるらしいので、全員、それに従っている。
アレル博士とタイラントのコンビネーションは完璧だから大丈夫だろうとアレル博士の背中を見送った。
「あれ？先輩と一緒にいるのは、ハンターじゃないですか？どうしたんですか？」
一見、とぼけている様に見えるこいつは、ジャスニール＝ウィルトン。
俺の事を何故か先輩と呼んでくる…ここでは、別に上下関係はないといっても聞かないので、今では、気にしないことにした。
俺は、こいつのことをジャンと呼んでいる…が、周りは、ウィルトンと呼んでいる。
どうやら、その呼び方も先輩と呼ばれる原因ではないかと、周りから言われていた。
「…こいつは、俺が今担当している奴で、エンという名前だ」
「よろしく頼むぜ、二人ともな」
エンは、軽くあいさつをした。

そんな会話をしていると、中からアレル博士と、タイラントが出てきた。
「改良が進んでいて、大分苦戦した。研究は成功しているようだな」
タイラントが言い、それに続くかのようにアレル博士が、

「どうやら…何者かが故意に動かしたようだな。調査の必要があるかもしれん」
と、言った。
それはただ事ではないと思っていると、人の気配に気がついた。
…そこにいたのは、最近この研究所に配属となった、エルダ＝ウォーリンがいた。
素性は全く解らないのだが、不思議と周りになじむ能力のようなものがあり、違和感なく話すことができる。
逆にそのことが不思議でならなかったが…。
「あれ？エルダさんいつからそこにいたんですか？」
ジャンがとぼけたような声で言った…この声は、ジャンの特徴であるからしょうがないが、何とかならないものかといつも思っているのだが…。、
「今、着いたばかりよ…博士と、タイラントがいるから、問題ないかとは、思っていたけどね…」
まぁ…彼女のいう通りか…多分、この研究所内で、この二人に勝てるような人材は居合わせていないはずだしな…。

「おっ、あんた、エルダって言うのか！？俺は、エンて言うんだ。よろしく頼むぜ」
エルダに近づきエンが名前を告げた。
…自分の名前を覚えてもらうという行為はとてもいいことなのだが、それ以上に、俺のつけた名前を気に入ってくれているあらわれだと思うと結構嬉しいものだと思った。
…まぁ、さすがのエルダも、いきなりハンターに話しかけられて驚いていた。
「あっ、えぇ、エンね…私はエルダよ…よろしくね」
と、計画のことを思い出したかのようにあいさつを返してた。
「…仕方ない、調査は明朝にして、もう寝ることにしようか？」

「それもそうですね。解散しましょう」
博士の提案に、ジョンソンが同意する形になり、一同は解散することになった。
原因はわからず終まいだったので、不安でないといえば嘘になってしまうが、気にしないようにした。

…そして、この事件は、翌日の事件の前兆だった…。

事件の発生

ビーッ！ビーッ！ビーッ！
明らかに支給された目覚ましと違う音で目を覚ますことになった。
エンの方はすでに起きていてあたりの様子をうかがっていた。
「おい！おきるの遅すぎるぞ！昨日の夜よりもひどいことになっているみたいだぞ！？…俺たちもとっとと、外に行かなきゃまずそうだ！」
現在の状況と次の行動を簡潔に述べた。
「昨日の夜？…誰かが故意にやったかもしれないっていうあれか？」
「ああ、しかも…今回は数十体もの奴らが暴走してしまっているらしいぞ！タイラントとか、アレルのおっさんだけじゃ苦しいみたいだから加勢しに行こうぜ！」
更にわかりやすく現在の状況をエンは言った。
「そうだな…よし！早速準備して加勢しに行こう！」
気合いを入れて手早く準備をはじめる。
こんな事態に備えて、アンブレラでは、対Ｂ．Ｏ．Ｗ．用の小型武器の開発をして、その完成品を研究員に支給されていた。
その威力は折り紙付きだが、扱いが難しい為、全員に支給されているわけでもなかったのだが…。
「おい、そいつで俺を撃つんじゃあねぇぞ。さすがにそいつは、俺でもやばそうだ！」
「手元が狂って撃っちまうかもな？」
「そいつは、勘弁してもらいたいな！」
冗談を言い合いながら準備を着々と進めた。

「何ってこった…！」
準備ができ、部屋から外に出た瞬間に、俺の目に飛び込んできた辺りの様子は、悽惨たるものとなっていた。

そう、辺りには、昨日まで普通に会話をしていた同僚や仲間が血を流して倒れていたのだ。
以前に、アンブレラのミスによって起こった事件を聞いてもいい気はしなかったのに、目の前で起こってしまい、言葉も出なかった。
「…おい！ウィリアム、来るぜ…！武器を、武器を早く構えろ！」
エンの忠告で我に返る。
…そうだ！…ここでやらなければ俺もやられてしまう…。
アレル博士に会えればきっと良い方法を思いつくに違いない…早く行かなくては。

暴走をしていたのは、エンと同じく、研究用に開発されたハンターだったが、エンのおかげで、傷を負うこともなく敵を撃退することができた。
「サンキュー、エン！助かったぜ」
「いいってことよ、お前は、俺の大事なパートナーだしな…それに、お前がいなと飯も食えなくなっちまうもんな！」
冗談も交ぜながら言ってきた…俺は、たった一日でここまで言語能力が上がったことに関心を覚えていた。
もっとも、簡単な日常会話くらいはインプットされていたのだろうが…。
「アレル博士に会えればきっと良い案を思いつくはずだ…とにかく、アレル博士に会いに行くぞ！」
小型情報端末をとり出し、アレル博士の現在地を調べる…博士は、結構近くにいることがすぐわかった。
ここからならば、走れば一分とかからずに行ける場所だった。

…博士は、すぐに見つかったのだが、交戦中であった…戦っている実験体の動きは、俺がさっき戦った物とは全く別次元の動きをしていた…。
「おい！アレルのおっさんに早く加勢しようぜ！…なんかやばそう

だ…ほら、行くぞ！ウィリアム！」
…どうやら、この実験体は、昨夜、博士とタイラントでも苦戦していたやつと同じタイプのやつのようだ…。
瞬発力を極度に鍛えてあり、攻撃が全く当たらない…いや、照準を合わせることすらできない…。
そのため、俺は、アンブレラに支給されていた武器以外の自前の武器を使うことにした。
刃渡りが、従来のナイフの二倍近くもある、オーダーメイドのナイフだ…俺は、こいつのことを、「サーベルナイフ」と呼んでいる。
こいつならば、支給された武器と違って、味方を攻撃してしまうことも最小限に抑えられる。
上手くすれば、仲間とのコンビネーションで、攻撃することだってできるはずだしな…。

「エン！こいつの動きを止められるか？」
「当然できるぜ！俺をなめちゃあいけないぜ！」
そういいながら、実験体に飛びかかった。
「…博士！動きが止まったところで同時に攻撃しましょう！」
「わかった！タイミングは私に合わせてくれ！」
エンの攻撃によって、実験体の動きが動きが止まった…その瞬間、博士得意の居合抜きが、実験体に放たれる。
そして、それに合わせて俺も攻撃を仕掛けた…博士の攻撃で両腕を断たれ、俺の攻撃で頭を割られた実験体は動かなくなった。

無事に実験体の撃退ができ、無事に博士と合流することができた。
…博士が実験体と一人で戦っていた理由は、最初は、タイラント共に戦っていたのだが、タイラントには、他の生存者の救助を優先するように頼んだからしい。
そして、その直後に俺たちが来て事なきを得たらしい…しかし、エンの実力は、これをで実証される形になったな。

「…ウィリアムとエンのおかげで命拾いできたな…やはり無茶はするものではない」
「そうだぜ？…年を考えなきゃだめだろう、若くはないんだぜ。なぁ、ウィリアム？」
「そうですよ…博士。…元陸軍の人間で、地上戦が得意だったからといっても無茶をしないで下さい」
「えっ！おっさ…っと、博士は陸軍の人間だったのかよ！？そいつは意外だなぁ」
「意外？…まぁ、そうかもしれんな。元陸軍の人間が博士と呼ばれているんだからな」
博士は、少し笑いながら言った。
博士は、陸軍の人間として在籍していた頃から、何でもできる秀才だったそうだ。
その中でも、研究と格闘技については、ずば抜けていたので、アンブレラにヘッドハンティングされたのである。
「…それはそうと、博士…。これから一体どうするべきでしょうか？…やはり、原因の究明を急ぐべきでしょうか？…それとも現在の状況の鎮圧が先でしょうか？」
博士に今後の動きを仰いだ。

「…この状況の改善には、仲間が必要だ。まずは、研究員達の救出を優先させよう」
「…じゃあ、こいつを使えばいいんだな？」
エンは、そう答えて小型情報端末をとり出した。
「…あれ？それは、どこから出したんだ？」
「お前は、ジャスニールかよ？…さっき、やられている奴から拝借したのさ…許可を得たわけではないから窃盗になるかな？」
笑いながら言った。
いつの間にか手の方まで早くなっているな…その上、小型情報端末までも扱えるようになっていのか…？

この知能の向上力は、正直驚かされるな…。
「おっ？見つかったぞ！えっと…ジョンソンと…ジャスニールは同じ所にいみたいだな。それで…エルダのネエチャンは…っと、少し離れた所で何かしているみたいだなぁ…？他の研究員達は…全く動きがないな…ざんねんだけどよ…全滅じゃあねぇかなぁ？」
…完璧に使いこなせているようだ。
…だが、気になることを言っていた。
「全滅だって！？」
「ん？ああ、この情報端末って、各研究員のものと連動しているんだろ？見てみろよ…少し前から、情報の発信が止まっているのが殆どだろ？」
俺にその小型情報端末の画面を見せた…確かに、発信が止まっている、多数目に付く…その中で、ジョンソン達の持つ端末だけが、情報を送ってい事が確認できた。
「…博士、ジョンソン達の所に向かいましょう！」
「…すまないが…私は、少し行かねばならないところがある…後で合流しよう。…合流する時に端末に直接連絡を入れる」
「そうですか…わかりました」
「それと、このファイルを渡しておく…行けたらここにも行っておいてくれ…今の情況の打開の為に役立つかもしれんからな」
そう言って、俺にファイルを渡し、博士は、ジョンソン達がいる方とは別の方向に向かって走り出していった。

秘密兵器の片鱗

「…ちょっと、そのファイルを見せてくんねぇか？」
手に持っていたファイルをエンに渡した。
そして、読み出したばかりなのにエンが大げさな声を上げる。
「おいっ！こいつは、すげぇことが書いてあるぞ。…お前と、アレルのおっさんが共同で研究していた新種の対Ｂ．Ｏ．Ｗ．用の兵器があるらしいじゃねぇか？」
「ん？ああ、でも、それは途中まで話が進んで駄目になっちまったさ。どう考えても無理だったんでな」
その兵器というのは、以前に、アンブレラの研究所で使われた、「リニアランチャー」を改良したもので、俺や、博士のような肉弾戦を得意とする人間用に、長さの調整ができる…ちょうどＳＦ映画など出てくる、ビームサーベルのような武器を開発しようとしていたのだ。
…しかし、膨大なエネルギーを必要としたために、小型化がうまくいかずに断念せざるを得なかった…。
「ところが、小型化がうまくいって、試作品までできていると知ったらどう思うよ？」
「…まさか、できているのか！？」
「できているらしいぜ？しかも、その試作品が置いてある場所まで書いてあるぜ？」
エンは、俺にそのことの書いてあるファイルを差し出した。
俺は、エンから、ひったくるようにしてファイルを取る…そこには、エンの言ったことがそのまま書いてあった。
「…新兵器の事もいいが…それよりも、仲間の方は良いのかい？」
「…！そうだったな、早く助けに行かなくては！」
ジャン達の所について一安心した。そこにはタイラントが加勢して、

すでに実験体を倒して話をしていた所だった。
「あっ！先輩来るのが遅いですよ！タイラントさんが来なかったらどうなっていたかわからなかったんですよ」
「…俺に、『さん』は不要だ」
「いいじゃないですか。別に悪いことを言った訳じゃないんですから」

「…そろそろ、話をしてもいいか？」
ジョンソンが口を開く。
「ウィル、お前は、慌ててきた様だが、何か理由があるんじゃあないのか？」
「…研究員は俺たち以外は、ほぼ全滅の状況にある。
今は、実験体を動かした張本人の捜索を優先させ、その理由を問いただそうと思うんだが…」
「…そういえば、エルダのネエチャンの姿をみた奴はいるかい？」
エンが、突然聞き出した。
あの情報端末には、この付近にいることがはっきりと映し出されたのに目の見えるところにはいない…。
「いや…俺は、見ていないな…」
ジョンソンがそう言って、ジャンとタイラントの方に目を向けるが、2人とも首を振った。
「…もしかすると、あのネエチャンが犯人かもしれないぞ？」
「なんてことを言うんだよ！エルダさんは犯人じゃない！」
「落ち着け、ジャスニール…『かも』、だと言っているだろう？…それよりも、何でそう思うんだ、エン？」
ジョンソンは、エンに疑問を投げかけた。
「…この情報端末には、この周辺にあのネエチャンがいるようなことが映っている…だが、実際には誰も見ていない。
…つまり、隠れて行動をしているということになるよな？」
「あぁ…確かにそうだな」

「…しかもよ？誰もあのネエチャンの素性を知らないないときている…外部からの侵入がないのならば、そんな奴が疑われるのは道理だろ？なぁ、ネエチャン？」
そう言いながら、エンは天井を見上げた。
すると、上で物音がしたかと思うと、天井からエルダが下りてきた。
「それもそうね。それにしても賢いわね。…私が前にみた化け物とは大違い」
「『エルダ＝ウォーリン』っていうのは、本名なのかい？」
「本当に賢いわね。私の名前は、『エイダ＝ウォン』よ…そういうことにしておいて貰えるかしら？」
その名前を聞いて、俺は、はっとした。
「エイダ…？ラクーンシティ郊外にあったアンブレラの研究所…そこに『エイダ』と、いう名の好きな人がいると言っていた知り合いがいたが…。
確か、その後ラクーンシティ全土に渡るウィルス漏洩事件の際に死んだ女性の中に…」
「ほぼ正解ね。…とりあえず、私のすべきことは終わったの…だから、ここに滞在する理由はないわ。
…それと、言い訳するわけじゃないけど、実験体を動かしたのは、私じゃないわよ？
もっと身近を疑ってみたらどうかしら？…じゃあ、機会があったらまたどこかで会いましょ？」
そう言って走り去ってしまった。

「…ほら、違ったじゃないですか。」
ジャンが言い放った、そのセリフには、何処か安心したかのようにも聞こえた。
…しかし、誰が犯人なのだろうか？

「…そういえば…アレル博士から連絡が来ないな…」

「そういえばそうだな…あのおっさん何かやることがあるって言ってたよな？」
「…とりあえず…博士に連絡をとるのを優先させた方がいいかもしれないな…エン、お前の情報端末で、博士の位置を調べてくれないか？」
ジョンソンがエンに言った。
「了解したぜ…ちょいと待ってくれよ、すぐ調べるから…っと…あれ？さっきの部屋から動いていないみたいだな？？」
エンが言った。
「…俺は、一端周辺に実験体が残っていないかを確認してからそっちに向かう」
タイラントはそう言って、俺達の向かう、博士のいる部屋とは別の方向に向かって歩き始めた。

…エンが調べた結果、博士は、研究室の一室から全く動こうとしなかった。
そのことに対して、多少の疑問を持っていたものの、深く気にすることなく博士のもとに向かっていた…。

秘密兵器

俺達は、博士のいる部屋の前についたのだが、部屋の中からは、何やら物音がするのが聞こえてきた。
「博士！…いますか！？」
部屋の中に向けて大声で聞いてみたが、博士からの返答は無く、その代わりに、中からの物音が止まった。

物音が止まったことを、博士が中で何かしていた手を止めたものと決め、入り口の扉を開いたのだが…そこに、博士の姿は無かった。
…正確に言うならば、博士であったと思われる生き物がそこにいた。
「…なんだこいつは！？こんな化け物見たことがないぞ！」
いつもは冷静なジョンソンですら、その異様さに、今回ばかりは冷静ではいられなかったようだ。
俺やジャンは、絶句してしまっていた。

「…おい！こいつはさすがにやべぇんじゃねぇのか…！？」
エンが口を開く…その声に、俺は、少しだけだが冷静さを取り戻し、その生き物の外見を改めて確認し始めた。
異常に発達した両腕は、女性のウェスト以上あり、手のひらは骨が異常に進化したのか、両手が爪のようになっていた。
また、頭はどこにあるのかがかろうじてわかる程度だったのだが…問題なのは足だった。
…いや、足というよりも触手のような物が、そこに足のあるべき位置に存在していた。
その触手の上に胴体がのかっている…そんな印象だった。
恐らく、足の筋繊維だけが異常に発達してしまった結果なのだろうか？
…とにかく、今は、この化け物の前から逃げなくてはならない！

何が、博士の身に起きて、何が原因で今の化け物の形状になってしまったかということは後で考えれば良い…。
いったん退いて、先刻博士から預かった、『博士が俺と共同研究をして、一度は、鎮座してしまったが、その後に試作品を完成させ兵器』…それを見つけることが先決だ…！

「エン！ジョンソン！ジャン！逃げるぞ！！」
俺は、一喝した。
エンがその言葉に真っ先に反応し、隣の研究室の入り口に向かって走り出し、それに次いで、俺とジョンソンが走り出した。
そして、今まで、身動きが取れないでいたジャンが、我に返ったかのように動き出し、一斉に逃げ出すことに成功した。
…はずだったのだが、触手の様に見えたものは、全てが稼働可能のパーツであった…そして、異常なまでの速さでの移動をし、俺達を追撃してきた。
エンが俺達よりも先んじて、出口の確保をしてくれていた為、俺達は部屋から飛び出すことに成功できたのだが、肝心のエンは、ジャンが少し逃げ遅れていたため、おとりになる形で、博士の前に立ちはだかっていた。
「…しょうがねぇなぁ、俺もどっかに逃げねぇとまずいな」
エンのぼやきが聞こえた後、エンが開いてくれていたドアがゆっくりと閉じ、中からは、激しい物音が響いた。

ピーピーピー

情報端末が誰かからのメッセージの受信を知らせた。
全部で二件…一件は、エンの持っている情報端末からだった。
内容は、今まさに入室してきたこの部屋に、兵器の試作品があるということだった。
何と…俺は、適当に扉を開けたのだと思ったのだが、エンは、わざ

わざ選んで扉を選んで開けたというのだ。
とにかく、エンに感謝し、無事を願うメッセージを送った。
…そして、もう一件は博士からだった。
どうやら、文脈から察するに、化け物化する直前のものらしい。
内容は、今回の一連の騒動の犯人は、博士自身であるということ…
そして、博士は、反アンブレラを掲げる組織に秘密裏に情報を提供していたらしい。
その組織の目的の中に、この研究所の破壊という物があり、その最終段階として、生物兵器の暴走を促し、高レベルバイオハザードを意図的に発生させ、
研究所に設置されている、爆破装置を動作させて、研究所ごと爆破して、この研究所の一切の研究を破壊しようと計画していたらしい…。
…しかし、作戦は失敗し、博士自身が、反アンブレラ組織の一員であるということがばれてしまい、
アンブレラ本社の人間に、対人実験として、Gーウィルスという新種のウィルスと、Tーウィルスの両ウィルスを大量に投与されてしまったらしい。
博士の送信してきたメールの後半部分は、既に理性がギリギリ保てているということがわかるだけの内容で、辛うじて、文章を書き終えて送信できたということが見て取れた…。
…博士が、対生物兵器に対した『強力な武器』の情報を、渡してくれていたのは、どこかで、自分がそういう存在になる可能性を考えていたのだろうか…。
アンブレラ内部の人間が、その情報を漏らす…それには、それだけの覚悟いることだったのかもしれない…。

「…博士だった化け物は、俺が倒す！ジョンソンと、ジャンは、援護をしてくれないか？」
…俺は、博士からの最後のメッセージ見て、化け物になる前の博士

なら、自分を止めることを望むだろうと決心し、２人に相談を持ちかけた。
「援護…？アレを倒す方法でもあるって言うのか？」
「そうですよ先輩！…あの、化け物…会社から支給された武器ではひるませることはできても倒せませんよ！？」
ジョンソンと、ジャンからの当然の返答を受けた俺は、
「絶対じゃない…けど、可能性くらいならこの部屋にある…」
「可能性？…一体どういうものか…手短に聞かせてもらえるか？」
「…アレを倒せる可能性を持った武器がある…博士から受け取った資料の中にある、試作品だが…」
「試作品？…そんな物が、あの化け物を倒すのに使えるというのか？」
「…保障は無い…だが、支給されている武器と比べればはるかに強力な武器のはずだ…恐らくこの研究所では一番のな」
「…わかった…お前のその言葉を信じよう…で、その武器とやらはこの部屋の何処にあるんだい？」
ジョンソンのその言葉を受けて、俺は、２人に資料を見せて、その武器を探すことを始めた。
ドアの向こう側からは、博士だった化け物の叫びとも、うめきともつかない声が響いていたが、この部屋に突入してくる気配は無かった…エンが戦っているのか？

試作の武器は、探し始めてからすぐに見つかり、その試作品を見ると、博士の名前と、「ＨＯＰＥ」と小さく刻まれていた。
この武器を使えるようにするにはいくつかの手順を踏まなければならば無いことが、資料には記されていて、それを順を追って行っていった。
まずは、エネルギーパックを本体の柄に当たる部分にセットする…一見するだけなら、少し大きめの乾電池にしか見えないのだが、実際には大容量バッテリーになっているらしく、

このパック一つあれば、この研究所の一部屋分の緊急電力として数時間程度なら持つようだ。
それほどのエネルギーパックを使用しても、十数分程度しか使用することが出来ないらしく、
それによって得られる破壊力を考えるだけでも恐ろしい武器ではないか…。
エネルギーパックは、試作用ということのためなのか、この部屋には1つしか用意されておらず、試作品からぶっつけ本番での性能テストになるのか…。

エネルギーパックのセットが済み、本体の電源を入れる…多少の振動を持ち手に感じる。
その後の操作は簡単で、柄の部分で操作の大部分を行う事となる。
柄の上部に当たる部分が左右に回転する仕組みなっていて、右にまわすと、刀身の部分が伸び、左にまわすと縮む。
基本操作はこれだけで、後は、刀身の部分を敵を通過させることによって、外部からの損傷もあるが、主に内部からの破壊をすることが出来る。
ただし、その性質上、敵を限定することが出来ず、誤って自分の体を通過させた場合は、その命の保障もされない…。
また、エネルギーの放出方法の調整でき、銃のように扱うことが出来る。
この方法で使うと、刀身を延ばして使うときよりも威力自体が落ちるが、エネルギーの消費を大幅に抑えることが出来る。
応用の方法としては、刀身を伸ばした上体で、放出量を増加させれば、ラクーンシティ郊外の研究所の事件の時に出現したという、大蛇のような突然変異の生物であったとしても、広範囲で内部からの破壊を行うことが出来るということだ。

…さて…準備は整った。

後は、この部屋から出て、博士だった化け物に、この武器が通じることを願うだけだ…。
そう思っていた時に、エンからの通信が入ってきた。
「エン！無事だったか！？」
「まぁな…試作品とやらはあったか…？…ちょいと今取り込み中だから手短に話すぞ？？」
「わかった！」
「タイラントが加勢に来てくれたおかげで、どうにか足止めが出来ているんだが、それ自体は既に時間の問題でよ…お前らは、加勢にこれるか…てか、来てくれ！」
その言葉で、通信は唐突に遮られて、部屋のドアの近くの壁に何かが激突する音が響いた。

「…ジョンソン…ジャン…自体は一刻を争う状況みたいだが…」
「みたいだな…だったら、早く加勢に行くぞ！…その試作品はちゃんとに使えるんだよな？」
「それは…多分大丈夫だ…この試作品の大元になる構想は、俺と博士で練っていたものだしな」
「…良し、それじゃあ、エン達の加勢に行くぞ！」
ジョンソンのその言葉を受けて、ドアを慎重に開け、外の様子を確認する…。
タイラントが、博士と正面から戦っているのが見えたが、タイラントの攻撃を受けても、びくともしない博士が見えた。
ドアから出てすぐに横を見ると、エンが倒れているのが確認できた。
「エン！大丈夫か！？」
「ん…よぉ…あんまり…大丈夫じゃねぇけど…少しすれば動ける様になるんじゃねぇかな…？」
「わかった…とりあえず、そこで待っていろ…この武器をアレに食らわせないとなら無いからな…」
「あったんだな…良し、ぶちかましてやれ！」

タイラントが、部屋から出てきた俺達の存在に気付いたらしい…が、それとほぼ同時に、博士の方もこちらの存在に気付き、タイラントを無視するかのようにして、こっちの方に体を向けて動きを開始し始めた。
「…俺を…無視するなよ！」
ガツンッ！という、壁に車でもぶつけた可能な激しい音共に、博士が一瞬ひるみ、その次の瞬間に博士からの攻撃を受けたタイラントが吹っ飛ばされて、逆側の壁にたたきつけられたのが確認できた…博士は、そのタイラントに接近して止めを指すように動き出した。

まずい！と思ったとき、俺の横から銃声が響き渡り、博士に着弾したのが見て取れた。
ジョンソンと、ジャンが博士に対して攻撃をしたようだ…博士の目標が、タイラントから再度俺達の方に代わったようだ…。

「さて…これで、一転して俺達がピンチだな…ウィル…？」
「そうだな…まずは、試させてもらっていいか？」
「な、何をですか…先輩？」
「こいつの威力さ…この距離から、エネルギーの弾を発射してそれが効くなら…多分勝てるだろ？」
そういいながら、試作品を博士に向け、エネルギーの出力値を低く抑えて博士に向けて発射する。
…被弾した博士が、苦しそうな唸り声を上げながら若干の痙攣を起こしているのを確認した。

「…どうやら、効く様だな？…ウィル…今、博士はこっちを見ていない…お前は博士の死角に回り込んでそいつを使ってくれ…俺達は囮になる」

「大丈夫なのか？」
「さぁな…だが、そいつの扱いをちゃんとにわかっているのはお前だけだ…だから頼むぞ？」
「…わかった…この武器ならいけるはずだ…だから…足止めは任せた！」
そういい残して、まだ痙攣から直らずこちらの様子を確認できない博士の死角にあたるような場所を探し、そこに隠れこみ、ジョンソンの方に手を振り合図を送った。

能力の目覚と絶望

ドンッ！ドンッ！ドンッ！
「こっちだ！」
そういいながら、ジョンソンが博士に向かって発砲をした。
未だ痙攣が残るように見受けられた博士だったのだが、それを意に介さないかのように、ジョンソンのほうに向き直った。
「よし…こっちにきやがったな…後は任せたぞ…ウィル…」

ジョンソンとジャンが、博士の気を引いている間に、博士の死角となるほうに回り込み、慎重にしかし、急ぎながら準備を進めた。
刀身の調整をし、普段使っているナイフと同じ程度の長さに調整をし、軽く振って、その使い心地を確認して、博士のほうに向き直った。
ジョンソンたちが、引き付けていてくれたおかげで、博士に気づかれること無く準備を済ませてジョンソンのほうを見る。
ジョンソンがこちらの状況に気づき、軽くうなづきそれにあわせるかのようにして、俺は、一気に博士との距離を縮めた。

まずは、脚と思われていた部分に対して、一度切りつけた。
突然の攻撃に、博士は体勢を崩した…そこで、さらにジョンソンたちに伸ばされていた、腕に対してもう一度切りつけた。
腕が切断されて、生き物のようにのた打ち回っているのが確認できたところで、最後の攻撃に移るためナイフを博士の体に突き立てた。

この武器の一番強い攻撃方法…つまり、相手の体内に大量のエネルギーを送り込むことによって、内部からの破壊を可能とする、エネルギーの局地的な放出方法…この方法ならば、強力なウィルス感染で、自己修復を行い続けるこの化け物でも倒せるはず…だった。

…博士は、死ななかった。
何と、エネルギーパックから注入した膨大な量のエネルギーを全て吸収してしまったのだ。
…いや、いくらかは漏れていったかもしれない。
しかし、その大部分を自分の体に取り込んでしまったことだけは間違いなかった。
…つまり、俺は、膨大なエネルギーをこの化け物に与えてしまっただけだった。

次の瞬間に見たもの、それは、ジョンソンと、ジャンが、その化け物に人形のように吹き飛ばされる姿だった。
絶対的な恐怖と絶望を目の当たりにして、死を覚悟した…が、その次に見たものは、突然激しく炎上する博士の姿だった。
それと同時に、十数年間封印され続けて、思い出すことすらできなかった記憶の一端が見えたのだった。

その記憶の時、俺は、十歳位の子供だった。何かに対してひどく怒っている様子がわかったのだが、俺が見たもの全てが炎上していくのだ。
何故、炎上していくのかそんなことはわからなかった。
正確には、その時はわからなかっただけなのかもしれない…今ならば、何となくであるがわかるような気がする。
サイコキネシスと呼ばれる能力の一種に、自然発火能力というものがある。
この能力は、個人差があるものの、念じるだけで火を発生させることができる能力である。
悪用すれば、証拠を残さずに放火することだってできるだろう。
恐らく、俺は、この能力を生まれつき使うことができた…俺には、十歳以前の記憶が全くない。

この危険な能力を一生涯封印するために、記憶自体にプロテクトのようなものをかけて封印した。
そして、今、死に直面にして再び、その能力が復活したということなのだろうか…？
…どちらにせよ、この能力のおかげで助かった。

…かに見えたのだが…博士は、炎上する身体も気にすることはなかった。
何故なら、こいつの中にあるのは、ウィルスによる殺戮の衝動と、不足分のエネルギーを埋めるためだけの、食に対する執念のようなものしかないのだから…。

全能力を使い、必死に抵抗したのだが、それは、焼け石に水でしかなかった。
本当に死を覚悟して受け入れなければならない…自分の無力さを呪った。
目を閉じ、圧倒的な力、絶望的な恐怖、それに対しての、全てに対してのあきらめ、降伏の意味で目を閉じたのだった。
俺は、もう目を開けることはないだろうと思った…そう、心の中で決めつけていた直後のことだった。

「あきらめるには…まだ、少し早いかもしれんぞ？」
懐かしい声がした。

ガーンッ！

固いものを、思いっきり叩いたような音がした。その直後に、
ズシーンッ！
重たいものが、落ちたような音があたりに響いた…。

その音に合わせるようにゆっくりと目を開けた。そこには、倒れている博士見ている、見覚えのある背中があった。
頭が混乱して思い出すことができなかったのだが…

「久し振りだな…クーパー。研究の方ははかどっているか？」
そう、もう一度その声を聞き、その俺の名前の呼び方を聞いて思い出したのだ。

救世主の正体

「ウェスカーさんですか！？…本当に、ウェスカーさんなんですか！？」
思わず、二度も聞いてしまったのだが、これにはちゃんとした理由もあった。
ウェスカーさんは、死んだという報告がされていたからだ。
まだ、開発段階のタイラントを無理やり動かしてしまった結果、自分自身がタイラントに殺されてしまったという報告だった…。
その報告を受けた時に、身寄りが無く、世捨て人となっていた俺を、助けてくれたその恩が返せなくなった悔しさと、どうしようもない悲しさに襲われた。
しかし、今は、その人が目の前にいてしっかりと会話できている…。
「クーパー…アンブレラの人間には、私が実験段階のタイラントを動かしたために殺され、さらに、研究施設も消滅した…そう報告されていたと思う。だが、それは違う…」
「…えっ？」
「タイラントに殺されたというのも、研究施設が消滅したのも事実だが、タイラントが私を襲ったのは、私の指示通り…ということだ」
…タイラントに、自分を襲わせた…？
「何でそんことをしたんですか？それに、何故タイラントに殺されたはずなのに生きているんですか？」
「…クーパー…悪いのだが、その質問は、後になりそうだ」
と言って、博士の方をあごで指した。
どうやら、少し気絶していたらしいのだが、今、それから回復しつつあるらしい。
「ところで聞くが、あそこに倒れている二人はお前の仲間だろうが…あそこに転がっている、ハンターとタイラントは、お前たちで倒したのか？」

「タイラントも、ハンターも俺たちの仲間ですよ」
「…なるほど、それは興味深い話だな…後で詳しく聞かせてもらえるか？」
「えぇ、まずは現状を抜け出すことができれば、いくらでもお話できると思います」
「ふむ…それは楽しみだな。とりあえず、私は、タイラントと、ハンターを運ぶ…そこで転がっている二人はお前に任せる」
そういって、タイラントとハンターを軽々と持ち上げ、走っていった。
…当然、俺には、そんな芸当できるわけも無いので、二人を起こすことにした。
まずは二人を揺すり、呼びかける。
「ジョンソン、ジャン、大丈夫か？」
その呼びかけに、ジョンソンの方が先に起きた。
「作戦は…失敗した、とにかく、ジャンをつれて、ひとまずこの場所を離れるぞ…」
ジョンソンは、すぐに動けそうだったので、二人で協力してジャンを運ぶことにした。

ウェスカーさんは、先に部屋を開けてまっていてくれた。
その扉に向かう途中で、ジャンも起きたので、今までの状況を説明した。
ジョンソンは、俺と同期で、ウェスカーさんのことを、尊敬している人の一人でもあるそうだ。
何度か、自身の研究の進捗状況の報告をしたことがあったらしいが、そのほぼすべてにおいて、的確な指示を仰げていたそうだ…。
そして、ジョンソンも、ウェスカーさんが、死んだと聞かされた時は、悲しみに襲われたらしい。
ジャンは、ウェスカーさんが、S・T・A・R・Sという機関に所属した後に入社したため、話では聞いたことがあるという程度だっ

たらしい…。

部屋に入り、さっき投げかけた質問について再度、問いかけた。

「少々長くなるのだが…」

そう前置きして、ウェスカーさんは、ウィルス研究の第一人者であったウィリアム＝バーキンの下で研究をしている時に、Ｔーウィルスを渡されたことを話した。

「Ｔーウィルスの効能自体はまだ実験段階だったが、人体に使いそれがうまくいけば外見を変えることなく、その恩恵を与れる…とのことでな…」

そして、前々からアンブレラの対立企業に入ろうという計画を立てていて、その機会をうかがっていたのだ。

そして、その機会というのが…先の洋館事件と呼ばれる事件である。対立企業に身売りするには、死んだと思わせることが一番良いということで、事前にＴーウィルスを自身に投与し、タイラントに自分自身を襲わせた…。

ウィルスの効果は絶大で、一度仮死状態になった後に、超人的な力を持って復活した…ということだ。

その力の程は、先ほどでの戦いや、タイラントとエンを運んだウェスカーさんが実証済だ。

そんな話をしている内に、タイラントと、エンが気がついたようだった。

…どうやら、どちらの傷もほとんどが治っったようだった。

「よう、ウィリアム！あの、化物は倒すことはできたのか？」

「…逃げるのが精一杯で、倒すことができなかった。」

「そうか…ん？この、サングラスの方は、どちら様で？」

エンがウェスカーさんに気がついて聞いてきた。

「その人は、俺の恩人で、タイラントとお前をここまで運んでくれた方だ」

「それは、ご苦労様で…って、俺だけならまだしも、タイラントも一緒に!?…それは、すごい力だな…」
「なるほど、少々うるさいが…言語を操るハンターか…これならばコミュニュケーションをとるのに、特殊な機械も必要ないな…確かに素晴らしい計画だ」
ウェスカーさんも、この計画について肯定的な意見を述べた。
「ところで、これからなのだが…あの化け物は、すぐにでも私たちがここにいることを見つけるだろう」
「その化け物はいったいどうやって撃退したんで?…あの武器も効かなかったみたいだし…」
エンがウェスカーさんの話に割って入った。
「撃退…というよりは、不意打ちで、少しの間黙らせた程度の効果しかなかったな…何にせよ、この不意打ちはもう使えないだろう」
「なるほど、不意打ちは確かにもう無理かぁ…」
エンがそう呟き、俺も、これといった手段も思い浮かばない中、ウェスカーさんが、
「そこで…一つ大きな賭けがある」
と、静かに言った。

決断の時

「…大きな賭けっていうのは、一体どんなものなのですか？」
ジョンソンは、ウェスカーさんに尋ねた。
…だが、ウェスカーさんはしばらく黙り込んだ。
「…私は、今、私のいる企業の方から、Ｇーウィルスと、Ｔーベロニカという新種のウィルスを受け取っている…。
こいつを、ここにいる人間に、直接投与する…理論上では、私の持っているＴーウィルスの力はもちろん、外に居る化け物の力をも超える、絶大な力を身につけられるはずだ…。
しかし、細胞レベルでの身体の急激な変化が起こるため、それに耐え切れないと、表にいる化け物と同じ存在になるか…最悪、肉体が完全に崩壊してしまう。
つまり、余程の精神力と身体レベルが要求される…と、言うことだ」
ウェスカーさんが静かにそのことを話し、エンが聞き返す。
「…でも、それしか道が無いんじゃないのかい？違うのかい？ウェスカーさんよぉ？」
「…賢いな。まさにその通りだ。私の力では、足止めになっても…いや、先ほどは不意をついたから何とかなったが真正面からだったら数分と持たないだろう。
…だからこそ、私自身や、外の化け物の力を越すような、絶大な力が必要なのだ」
ウェスカーさんがそう言い、しばらくの沈黙が流れ、その沈黙を破ったのは、ジャンだった。
「…でも、誰にそのウィルスを投与するんですか？…最悪の場合は、化け物が増えてしまうことになって、逆に危なくなるんですよね？？だったら、慎重に選ばないと…」
ジャンが、不安交じりに、ウェスカーさんにそう言い、その言葉を受けたウェスカーさんは、

「…そのことなんだが、私は、クーパーに任せたいと思うのだが…」
と、俺の方を向いて、そう言った。
「俺…ですか？でも、何で俺なんですか？」
ウェスカーさんに言われて、なぜ自分が選ばれたのかわからなくなり、聞き返していた。
「…先程、私がお前たちを助けに入る少し前に、あの化け物が突然炎上する姿が見えた。…あれは、クーパー、お前がやったんだろ？」
「…わかりません…ただ、多分、それをやったのは…俺です」
「ふむ…恐らく、サイコキネシスと呼ばれる超能力の一種だろう」
そのように理由を簡潔に述べた。
「…でも、あれは自在に使える訳ではないんです。…あの時は、夢中で気がついたら使っていたんです…それに、今は、使える気がしませんし…」
少し弱気に、俺は答えた。
「でもよぉ…いつでも、使えるっての逆に不便じゃないか？本当に必要な時に使えるからこそ、威力があって使えるものになるんじゃないのか？」
エンが、そう諭してきた。
「そいつの言う通りだな…自在である必要はない…Tーベロニカを作った研究者そのウィルスを自身になじませ、その力を持って、触れずして物体を炎上させる力を身につけていた。
…だが、お前はそれをなしに、その能力があるというだから、相当の精神力があるということになる」
ウェスカーさんがそこまで静かに話をした。
「…Tーベロニカって言うウィルスで、サイコキネシスを身につけたということかい？」
エンが、ウェスカーさんの話に疑問を投げかけた。
「正確には少し違うのだがな…だが、元々、力が備わっているなら、それが向上することだけは確実だろう…だからこそ、クーパー、お前が適任であると思うんだ。どうだ？」

ウェスカーさんは、俺の方を直視して、言った。
…確かにエンの言う通りだ。
抜けている記憶の時には、自在に使えたのかもしれない…だからこそ、記憶を封印して、使えないようにしたんだろう。
そして、俺は、しばらく考えた…ウィルスによって、人間であることを辞めるのは、俺にとってはどうでもいいことであった。
ここに居る仲間が助かる、この状況から脱出できるというのなら、そのことに固執している理由は無いと考えたからだ…。
…ただ、今、最も怖いことは、失敗して、ここにいる仲間に危害を加えてしまい、最悪の場合、殺してしまうのではないかということだった。
恩人のウェスカーさん、同僚のジョンソン、俺を敬っているジャン、そして、生物兵器ながらも信頼のできる仲間の、エンと、タイラント…。

「…おい！ウィリアム！いつまで考えている！？俺たちのことはいいから、賭けにのっちまえよ！どっちにしたってそれしか方法が無いんだろ！？」
エンが一喝した。
「そうですよ、先輩！…僕には何も出来ないみたいですし…」
ジャンが少し抑揚の低い声で言った。
「やるんだったら…俺は、お前が成功する方に賭けるつもりだが？」
ジョンソンが、いつもの冷静な口調で2人に続いて言った。
「ウィルスの細胞の暴走は、俺が全力で止めてやる…安心していい」
力強く、タイラントは俺に言った。
「クーパー…仲間に信頼されているじゃないか…さて、どうする？」
ウェスカーさんが、改めて聞いてきた。

「…わかりました。やってみます…もしもの時は、ためらわずに頭を完全に破壊してしまって下さい」

きっぱりと、そう言いきり、ウェスカーさんから注射を受け取った。

ウィルス注入

ウェスカーさんが、注射を手渡し、頷いたその直後だった。

ガーンッ！ガーンッ！ガーンッ！

扉に何かがぶつかる音が響いた…博士だった化け物が、意識を取り戻したようだった。

「…仕方ない、ここは、私たちが抑えに行って来よう…どれだけ持つは、分からんが…」

ウェスカーさんが言い、俺以外に目線を送った。

「確か君は、ジョンソンだったな？」

「はい、覚えて頂けていて光栄です」

「君は…」

「ジャスニールです」

ウェスカーさんは、それを聞いて、頷いてタイラントの方を見た。

「君のことは、タイラントでいいのかな？」

「ああ、ここの研究所の人間からは、そのように呼ばれている…番号で呼ぶやつもいたがな」

「俺は、エンだぜ、旦那」

エンが、2人の会話に割って入る形でウェスカーさんに言った。

そこでウェスカーさんは頷き、少し思案しているようだった。

「…ジョンソン、ジャスニール、エン…君たちは、私の援護役に回ってもらう…戦えるな？」

3人は頷く。

「俺は、さっきやられたからな…きっちりと、あのおっさんにお返しをしておかないと気がすまないぜ！」

エンはそう言った。

ウェスカーさんはそれを確認して更に続ける。

「タイラント…君は、ここに残って、クーパーの状況を見てもらう…暴走を止めるには、覚悟必要になるが…」
「問題は無い…元々、そういったトラブルのために、俺が居るのだからな」
タイラントは、ウェスカーさんからの言葉を受けて言った。
そして、ウェスカーさんは、最後に俺に対して言う。
「クーパー…早速だが、注射してくれ。あまり時間は無いが…ウィルスに負けるないようにな」
俺は、ウェスカーさんに向かって頷き、受け取ったウィルスを注射し、それを確認してから、ウェスカーさんたちは外に出て扉をすぐに閉めた。

ウィルスを注射した直後、頭に倦怠感が広がる中、タイラントに聞いた。
「さっき、博士に攻撃を受けたあとに、身体に変化を感じたか？」
「…いや…なぜそんな事を聞く？」
「…お前は、言語を操れるように改良をされた『タイラント』だ…従来の『タイラント』とは、一線を画している」
「…確かにな…それと、身体の変化が何か関係あるのか？」
「…ひょっとしたら…自分の意思で…ぐっ」

タイラントに、自分の考えを伝いえようとした瞬間、全身を例えようにない嫌悪感が襲った。
その直後、身体が動かなくなり、だんだん意識が遠くなってきた。

「おい！ウィリアム、大丈夫か！？」
「…多分…お前は…自分の意思で…身体を、変…化で…き…るような」
搾り出すように、それだけを言った直後にそれは起こった。
それは…全身を襲う想像を絶する激痛だった。

意識は、半ば朦朧としていたのだが、気づいたら激痛の余り、暴れ出していた。
近くまで接近していたタイラントを殴り飛ばし、壁を叩き、床を破壊し、天井に穴を開けた。
しかし、それでも暴れ足りなかったのだった。
その激痛を例えるならば、全身を鋭い刃物でバラバラに引き裂くような感じだった。
その激痛が続いた。
1分か…それとも2分くらいの出来事だったのだろうが…俺には、果ても無く長い時間にも感じられた。

身体を蝕むような激痛が鋭い刃物によるものから、内部から破壊するような激痛に変わる。
何者かが、体内から破壊をし出てくる…そんなような激痛が、更に長く感じる時間続いた。
とにかく、ひたすらその激痛に暴れながらも耐え続けた…。
そして、突然それが起こった…痛みが無くなり、その次の瞬間には完全に意識が無くなってしまったのだった。

この世にあらざる力

…どれだけの時間がたったのだろうか？
外では、何やら物音がしている。
何の音なのか…全く認識できなかった。

「おい！ウィリアム！気がついたか！？」
…その声の主がタイラントであることに気づくのに、少し時間がかかった。
「ん？ああ、タイラントか…おはよう」
自分でも妙に落ち着いていると思いながら、そう言い返していた。
「本当に…大丈夫か？」
心配そうなその声を聞き、改めて部屋を見渡すと、あちこち破壊されているのがわかった。
自分でやったと認識するのに時間がかかった…とにかく、ウィルスの発作中の記憶は途切れ途切れで、一本の記憶として繋がる事が無かったからだ。
「…どうやら、大分、暴れまわったみたいだな…お前の方こそ大丈夫なのか？」
タイラントが身に着けていたコートの右腕のひじから先がボロボロに破けているのが目に付き聞く。
「あぁ…どうにかな」
「そのコートは…？」
「お前ではない…俺自身の力でこうなった…どうやら、お前が言いたかったことの通りみたいだな」
タイラントの台詞に自分が何を言ったかを思い出そうとした…数分かそれくらい前のことのはずなのに、思い出すのに時間が少し必要だった。

「…自分の意思での変化…か？」
「まぁ、そんなところだ…切羽詰った状況だったからこそ…使えたのかもしれんがな」
そういいながら、右手を俺の前に出した。
「…こんな感じにな…」
タイラントの右手が変化し始め、資料にあった、プロトタイプのタイラントと似た爪の様な形状に変化した。
「なるほど…な」
「便利ではあるが、日常生活には、支障が出るな」
そういいながら、タイラントの手が徐々に元の手に変化した。
「それもそうだな」
タイラントの冗談めいた発言に頷いた。

「…それで、ウェスカーさんたちは、まだ戦ったいるのか？」
「…ああ、まだ交戦中だ。この力を使えば…多少は加勢できるとは思うんだが…」
「そうか…ということは、この力をすぐにでも試すことができるということだな？」
「試す？そんな相手じゃ無いことは知っているはずだろう？」
「確かにな…試すとか…そういう相手ではないよな」
「…そうだろう…とにかく、俺と一緒に加勢に向かって、どうにか打開する手立てを…」
「…お前は、俺を抑えるのに力を使っただろ？…とりあえず、少し休んでいればいい…脱出のためにな」
「…脱出？」
「試すとか…そういう相手ではなかったのは、さっきまでの話ってことだ…今の俺ならば、1人でも十分さ」
少し笑いながら言った。
「…血迷ったか？」
「まぁ…見ていてくれよ」

そういいながら、タイラントを手招きしつつ、ゆっくりと外に出た。
大分苦戦しているのが見てすぐにわかった。
「ウェスカーさん、お待たせしてしまって申し訳ありません…交代しましょう…とりあえず、俺1人で相手しますので、休んでいてください」
ウェスカーさん、ジョンソン、ジャン、そして、エンの顔を見渡しながら言った。
「ウィル…加勢してくれるなら分かるが…交代？1人でやる??どうしたんだ？頭がおかしくなったのか？」
「…まあ、いいから見てろよ、ジョンソン」
博士であった化け物を睨み付け、そのままゆっくりと近づいた。
あまりに、無防備に近づいてくるためなのか、博士はその動きを止め、更に交戦していた4人と、
今まさに部屋から出たばかりのタイラントまでも動きを止めて見るだけになってしまっていた。

ガンッ！

右の拳が博士の顔に入り、そのまま地面に伏せさせる。

…絶大な力を手に入れられる…まさにその通りだった。
4人がかりでも苦戦していた化け物を、ものの数秒で、地面に伏せさせてしまったのだから。
しかも、武器と呼べるものは一切使わず、右手一本だけで。
「嘘だろ？マジで、強くなっているじゃねぇかよ。ウィリアム！」
突然の出来事に浸っている所にウェスカーさんが言葉を挟む。
「…だが、まだ安心しない方が良さそうだな…まだ生きている。しかも、まだまだ、こいつの肉体は進化し続けているな…来るぞ！」

可能性

ウェスカーさんが注意を促した次の瞬間のことだった。
博士であったその化け物は、その姿がどんどん変形していき、かろうじて腕であると分かっていた場所までも複数の触手に分かれ始めていた。
その化け物は、変化の急激さのせいか、暴れまわっていた。
その間に、俺たちは一旦距離をとることにした。

「…どうやら、こいつを完全に殺すには…跡形もなく破壊してしまうしかないようだな…どこを破壊すれば良いか…見当も付かない」
ウェスカーさんは、こちらに同意を求めるように言った。
「…そうみたいですね…時間は、稼げますか？」
「わからんが…期待するほど稼げるとは正直思えんが…」
ウェスカーさんが言葉を続けようとしたところでタイラントが割って入ってきた。
「俺も手伝える…さっきよりは、それなりの戦力なれるつもりだ」
そういいながら両腕を前に出し、先ほど、俺の前でやったような変化を両腕に対して行って見せた。
ウェスカーさんはその変化を見て少し驚いていた。
「…なるほどな…確かに、この力があるなら、それなりに時間は稼げそうだな…」
「タイラント！…それ、どうやってるんだ??俺にも出来るか！?」
エンが驚いた声を上げて、タイラントに詰め寄った。
「…わからんが…俺と似たような、『開発』が行われているのなら、あるいは出来るかもしれんが…」
俺は、タイラントとエンとのやり取りを見て、ちょっとした可能性に賭けることを考えた。

…ウェスカーさんとタイラント…この2人で稼げる時間はどれくらいか？
可能ならば、もう1人くらいは、あの化物にある程度抵抗できる力を持てるやつがいれば…そう考えた。

「エン…ココの壁の強度がどれくらいあるかわかるか？」
「へ？…壁の強度なんかわからないけど、あの化物が叩いても、完全に壊れていないし…相当なもんじゃねぇのか？」
「…俺自身にも、ココの壁の強度については良くわからない…だが」

ドガン！

「…今の俺だと、コレくらいは壊せる…」
壁を拳で思いっきり殴り、貫通はしないにせよ天井まで届くかのようなヒビをそこの壁に作った。
「うげっ！すげぇな！…だけどよ…それがどうしたんだい？」
「…今から…お前に対して、この拳を放つ…いいな？」
俺は、そう言った。
「…本気か？」
その言葉に反応をしたのは、ジョンソンだった。
他の人の反応は人それぞれだったが、ウェスカーさんとタイラントの2人は、その意図がわかったのか押し黙っていた。
「その力で、エンを殴ったら…想像するまでも無い結果になる…それで、あの博士に勝てるわけ無いだろ！」
「…いや、俺は、受けるぜ…ウィリアムがわざわざ言うって事は…なんか考えがあるんだろ？」
ジョンソンの言葉を切ったのは、エンだった。
エンは、まっすぐ俺の方を見て言う。
「…何を考えているのか…いまいちわかんねぇところがあるんだが…考えがあるなら、加減するのとかは無しだぜ？…壊すんならきっ

ちりと…な？」
俺は黙って頷き、エンの前で構えた。
「エン…死ぬなよ！？」
そう言って、エンに対して、博士だった化け物を殴ったときより、壁を殴ったときよりも、強く、早い拳を放った。

エンの力、次の作戦

ガキィーンッ！

固い金属を叩くような音が辺りに響いた。

「死ぬなよって…そんな攻撃振りかざしといて、無茶な話だろ…？」
エンのはっきりとした、その声が聞こえたところで、エンが続けて言った。
「あれ？…俺、生きているみたいだな…ってか、なんだ、この手！？」

エンを殴った俺の拳の方がダメージを負う形になってしまったのだが、思った以上のことが起きたようだった。
エンは、片手を前に出し、俺の拳を受け止め、逆の手を地面に手を付いている形だった。
ただ、殴る前と違うところが2箇所あった。
受け止めた方の手は、盾のように広がり、金属のように固い構造になり、俺の拳を受けて、
逆の手は、エンの身体を真っ直ぐに保つように、地面に固定されていた。
正面の手は盾の役割をして、逆側の手では、クッションの役割果たす形だった。

「…つまり、こうなることを予想していたんだな？タイラント、そこのサングラスの旦那は？」
エンは、俺ではなく、先ほどのやり取りで、何か考えるある感じだった2人にそのことをたずねた。
「…この結果は、私としても、予想外の結果だ…少なくとも、生物

兵器の進化の高い可能性を見る良い結果になったといえるな」
「俺も、予想外だったな…俺と同じ変化ではない…そうとしかいえないな」
両者の意見が出揃ったところで、エンは改めて俺に尋ねた。
「ウィリアムは…どうなんだ？」
「…タイラントの時と同じような結果を考えていたが…お前が守る力を欲したなら、俺は、お前に守ってもらうことにするかな？」
冗談っぽく俺は言った。
「ハハッ！…確かに、お前の力があれば、俺に力は必要ないもんな…じゃあ、守りは任せておけ！」

そんなやり取りを見ていた、ジョンソンは、あきれた風に言った。
「もしも、うまくいっていなかったらどうするつもりだったんだ？」
「…多分、それはなかった…かな？…エンが失敗するとも思えないしな」
「…ふっ、仲がいい事だな…で、これからどうするんだ？」

…確かに、エンが力の片鱗を認めて、その力を一時的でも開放したとしても、一時しのぎでしかない…。
それを考えると、状況が大きく進展したとは考えづらかった…いや、守る力だったからこそ、これからの攻撃が楽になるのかも知れない。

「…エンの守りがあるということは…お前のサイコキネシスの力を使う時の様だな…あいつに、今の能力中、最大のやつ…やれるな？」
ウェスカーさんのその問いに黙って頷いた。
「…でも、集中するのに時間が必要です…お願いできますか？」
「…どれくらいだ？」
「3分…いや、2分ほど足止めしていただければいけると思います」
「ふっ…それくらいなら、必死に足止めする必要性も薄いな」
「よろしくお願いします」

そういって、俺は相手にこれからぶつける力のイメージを作り始めた。

「さて…君たち2人は、ここでクーパーの援護を頼む…といっても、ここまで化物がこれたらの話になるが…」
ジョンソンとジャンの2人は、黙って頷いた。
今いるメンバーの中で唯一『人間』である彼らにとっては、下手に動くよりも、動かない方が限りなく安全だった。
「タイラント、お前は、私と一緒に戦ってもらう」
「任せてくれ」
タイラントの両手が異形に変化を始めたのを確認してから、ウェスカーさんは続けた。
「そして、エン…お前は、私とタイラントの…文字通り盾になってもらいたいのだが…」
「ヘッ、さっきのウィリアムのパンチと比べれば、あの化物の攻撃くらいどうって事無いさ…任せてくれ！」
ウェスカーさんはそれ以上は話さず、エンに先に行くように指先で指示を出し、エンは、それに従って、博士だった化物の前に立ちはだかった。

「…ジョンソン、ジャン…俺が、コレをやったら、すぐに逃げなければ手遅れになると思う…退路の確保…お願いできるか？」
前線に向かった3人の背中を見ながら、2人に言った。
「…そいつは、それ程やばいものになるのか？」
最初に口を開いたのはジョンソンだった。
ジャンはというと…ジョンソンの問いの答えを待つかのように、ただ俺を見ているだけだった。
「…わからない…わからないけど、あの博士を…化物を倒せるだけの現象を起こしたとなると…あの化物より先の廊下は通れなくなる…」

「…そうか…わかった…今のお前がそういうなら、そうなるんだな？…ウィルトン…行くぞ！」
ジョンソンがそういって、ジャンを連れて退路の確保のために去っていった。

エンの覚悟

ジョンソンとジャンの2人を見送った後、再び3人の方に向き直った。

「俺は…盾…すべてを…！」

そう呟きながら、エンの体がさっきのときよりも、激しく変化し始めているのが見えた。

「盾と形容するには…いささか形が定まっていないな…？」

エンの全身は、通路にかかるクモの巣のように拡がっていた。

「…そういうのは、気にするもんじゃねぇぜ…とにかく、あの化物の攻撃はコレで防げるだろ？」

「柔軟性を持ちつつも、高い強度持っているのだな…どれくらい維持できる？」

「…さぁね…やばくなったら知らせるから、頼むぜ」

「良いだろう…では、私とタイラントが通れるくらいのスペースを開けてくれ」

「無茶な注文をするねぇ…ちょっと待ってくれ…」

そういうと、ウェスカーさんと、タイラントが通れるくらいのスペースがクモの巣に広がり、2人が通り過ぎてから、そのスペースは塞がっていった。

「器用…というか、奇妙なことができるようになったな…エン」

「はっ、お前のおかげというべきかね…まぁ、コレはコレで楽しいから良いが…って、お前は集中していろよ、ウィリアム！」

「言われずとも…集中しているさ…」

エンの言葉を聞き、俺は、更なる集中体勢に入った。

化け物が、再生できないレベルまでの炎上…具体性が薄い…イメージするなら…溶岩か？

あの、化け物の頭の上から溶岩を絶え間なく注ぎ続ける…そんなイ

メージか…？
イメージを膨らまし…実際に、あの化物に対してそれを行う…そんなイメージを創りながら集中していた。

「…エン、その状態から元に戻るのにどれくらいかかる？」
「へ？…そうだなぁ…コレになった時よりも、少し時間はかかると思うぜ…なんでだ？」
「…俺が、今作ろうとしているものを放つのに、さっきお前が作ったような隙間だけだと、巻き添えを喰うことになる…」
「…なるほどな…じゃあ、俺よりも、今戦っている2人に合図が先だろ？…どちらにしても、あいつらが逃げられないことには、俺も退けないしな？」
「なら…あの2人への合図は…お前に任せて大丈夫だな？…次に、俺が目を開けたときが…俺からの合図だ」
「わかったぜ…まぁ、せいぜい派手なのを頼むぜ～」

エンと俺とがそんなやり取りをしている最中、ウェスカーさんと、タイラントの2人は、左右に分断して、博士と戦っていた。
…戦っている…というよりは、至近距離で逃げ回っていると言う表現の方が近いのかもしれない。
タイラントは、両手を強化して戦っているため、攻撃を防御しながら力任せに攻撃をしている。
ウェスカーさんは、フットワークを利用して、相手の攻撃が届かないぎりぎりの位置と、相手の懐を往復しながら攻撃を加えている。
…この2人なら、十分な時間を作ってくれる…そういう確信の下、エンとの会話が終わり、すぐに目を閉じて、更に意識を集中させ始めた。

…実際の時間にしたら数分だった…が、俺は、もっと長い時間かかっていたと思った。

ゆっくりと目を開け、エンのほうに視線を送ると、エンがその動作に気づいたらしく、急速に元の姿へと変形を始めた。
そして、俺の方を振り返ることなく、博士と戦っている2人の視界に入るところに一気に距離を詰めて、今エンが来た道の先を黙って指差した。
その動作だけで、2人は現在の状況を読み取り、その場を退去する体勢に入ったが、すぐにエンのほうを向いて、
『お前はどうするんだ？』と言うような視線を向けたが、エンは首を振って、2人を退路の先に行くように促す視線を送った。

その、数秒にも満たないわずかな時間を見逃さず、博士の攻撃が飛んでくるが、その攻撃が2人に到達する前に、エンが遮った。
続けざまに、攻撃を続けているが、その攻撃すべてを、エンが遮るため、2人に届くことはなかった。

エンの誘導の下、2人が、俺の方にかけてきたが、エンはその場に残って、博士の足止めをしていた。
「エン！早くこっちに…」
「…いいから、撃て…それくらい、俺はよけられるからよぉ！」
黙って、2人に指示を出していたエンが、声を荒げて、俺に言った。
「…エンの判断は正しいが…最後の判断をするのは、クーパー…お前だ」
2人が俺の立っている辺りまで戻ってきて、ウェスカーさんが静かにそう言った。

…わかっている…確かに、これから俺が撃とうとしているものを、確実に当てるには、犠牲が必要になる…。
ぎりぎりまで、博士を足止めできなければならないし、それをやったら…必然的に巻き添えを喰うからだ…。
エンの力なら、確かに、生き残る可能性が、ウェスカーさんやタイ

ラントよりもわずかにだが…高い。
それにしても…絶望的に低い…それだけは間違えの無い事実だ…。

「おい！ウィリアム、早く撃て！…どっちにしたって、このままじゃあ長くは持たないぜ！」
単純に攻撃を受け続けるだけでも、もって数秒か？…今撃たなければ、わずかな可能性すらなくなる…ということか…。

「…わかった…今撃つ…覚悟を決めてくれよ！」
「ヘッ、望むところだぜ…」

消えたエン

博士だった怪物に放たれた炎の壁は、博士だけでなく、その進路を阻んでいたエンも飲み込んでいった…。
一瞬の出来事だったため、エンが炎に巻き込まれてしまったのか、無事逃げ切ることができたのか…それすら確認することすらままならかった。
あまりの火力の強さに、壁の強度が落ち、崩壊が始まってしまったからだった。

エンの姿は見えなかったが、炎上している博士の姿がはっきりと見てわかった。
あまりの熱量に苦しんでいるようにも、前が見えないことの苛立ちから暴れているようにも見えた。
崩壊していく天井につぶされながらも、暴れ続けている…早くこの場を離れなければ、アレに巻き込まれることになる…。
「エン…」

「エンはどうした？」
ウェスカーさんたちと合流し、一番最初に投げかけられたのは、その言葉だった。
「…博士を足止めするために…」
「…そうか…」
それだけのやり取りをしてから、現状について説明をした。
「あっちの通路は、先の攻撃で崩壊が始まっています…ジョンソン達が退路を確保しているはずですので…」
「そうだな…急いだ方が良いだろう」
ジョンソン達は、退路を確保していた…が、さっき俺が放った攻撃

が原因で、
退路の先の通路が崩壊して、先に進めなくなってしまったらしい。
「退路自体は、いくつか確保できていたつもりだったんだけどな…
どうにも、見通しは甘かったらしい」
ジョンソンはそういいながら、頭を振った。
退路が確保できてきない現状で、次にどうするべきかを考えようとしたそのときだった。

「ガァァァァッ！」
叫びとも、悲鳴ともわからないような声が、通路の先のほうから響き渡り、一斉に、そっちの方に目を向けた。
「…退路の事について、考えるのはもう少し後になりそうだな…？」
ウェスカーさんがそういって、通路の先に警戒を促した瞬間だった。
後から、ココに来た、俺とウェスカーさんと、タイラントの間を何かがすり抜けて行き、ジャンの体に当たり吹き飛ばされるのが見えた。
…ジャンに当たった…いや、刺さったのは、博士の手だった部分か、足だった部分か…既に判別することはできなくなっていたのだが、間違いなく、博士だった『一部』だった。

「ウィルトン！…大丈夫か！？」
一瞬何がおきたのかがわからない状況下で、一番最初に動いたのが、ジョンソンだった。
ジャンからの返答は無く、ジョンソンが息があるかを直ぐに確認した。
「…とりあえず、生きている…みたいだが…見ての通り…だな」
当たった衝撃で気絶しただけのようだったが…深く刺さってしまっているため、抜くのも危険だし、このままにしておくわけにも行かない状況になった。

「…次は、本体が来ると言うことか…ジョンソン、君は、タイラントと共に、そこの彼と、安全な場所に移動してくれ…ココは、私とクーパーが受け持とう」
「…わかりました…でも、退路はどうするんですか…？」
「…それについては、私に考えがある…計画も無く、私自身が籍を置いていて、抜けた会社に侵入するわけにも行かないものでね」
ウェスカーさんがそう言って、飛んできた先を見据えて、先ほどよりも強い警戒を向けた。
ジョンソンは、ジャンを抱えて、その場を立ち上がり、タイラントがその後について、移動を開始しようとした時だった。

「ウェスカー…退路の確保ができたわよ」
聞き覚えのある、声が天井の方から聞こえたかと思うと、通風孔の蓋が外れ落ち、1人の女性の姿が見えた。
「ご苦労だったな、エイダ…直ぐに行きたいのだが、どうにも、まだやらないとならない野暮用が残っている」
「あら、それは残念…とりあえず、この退路も長くは持たないと思うわ」
「早く終わらせろ…ということか…クーパー、足止めで構わない…ヤツが来ると思われる、この先の通路の天井を崩壊させるのに、どれくらいかかる？」
「直接殴るなら…2～3発ほどで、落とせると思いますよ」
「…確かに、できるなら、そっちの方が早そうだな…わかった。私は、彼らを通風孔に上げ、退路に向かわせる、お前は…」
「足止め…ですね、了解しました」
「…任せたぞ」

ジャンの決意

俺がこれから来るであろう博士の足止めのために、攻撃態勢を整えて、
これから、目標である、天井に攻撃をしようとしたときに、通路の先から何かが近づいてくる気配を感じ、そちらに注意を向けた。
「…予想以上に早い…天井を崩す暇がないなんて…！」

「あちゃ～…間に合わなかったか…とりあえず、恐えから、構えだけ解いてくれねえか？」
通路の先からやってきたのはエンだった。
「エンか！？…無事だったんだな…」
「俺がちょっと受けちまったからな…博士に当たる分が減っちまって悪かったな」
「そんなことより…あんな中でよく無事に…」
「まぁ、さっきの変形と同じ原理よ…ぎりぎりまで引き付けないといけなかったからな…っと、それよりジャスニールを治さないとな！」
「…治す？」
「…見てろって」
そういいながら、エンはジャンに刺さった博士の一部を抜き去りその直後に、自分の腕を刺した。
「おい！何をやって…」
「いいから、見てろって！」
刺したという表現は正しくなかった。
エンは、その腕をジャンの傷口を覆いこむように変形させていた。
そんな作業を始めて、数分と経たないうちに、エンはその腕の変形をといた。
「…とりあえず、傷口はコレでよし…っと」

そういって、エンの腕がどけたところには、傷口など見えない状態にまで治っていた。
「どっちにしても、近場の病院とか医療施設連れて行かないと、命の保証できないんだけどな」
エンは、そう言い足した。
「傷口は治ったんだろう？」
「…とりあえず、俺の細胞を少し使って目立った傷は治したけど血液までは生成できないからなぁ…万能じゃあ無いんだよな」
そんなやり取りをしていると、通路の先から、大きな音が響き渡った。
「ありゃ、追いついてきちまったか…結構、瀕死だったから直ぐにこれないと思ったのになぁ…」
エンが軽口を叩いた。
「なら、もう一度…！」
「やめておいた方が良い…クーパー」
ウェスカーさんが制止に入ってきた。
「おそらく、もう一度使ったなら、アレを倒せても、共倒れになる…だろ？」
「まぁ、そうなるんじゃねぇのかな？…あっちの通路の強度はとっくに限界点超えているしな」
逃げるための退路が確保されたのに、追ってきた博士。
それを迎撃しようとすれば、退路ごと崩壊する…どうすればいいのか考えていたとき、ジャンが言葉を発した。
「…僕が…囮になります」
「お前…そんな身体で！」
「…この近くの医療施設といっても、この研究所内を除けば本土に戻るしかない…そうですよね？」
ジャンのいう通り、医療設備に関して言えば最高水準のものが研究所施設内にあった。
しかし、その設備に到達することは、ほぼ不可能であるということ

もわかりきっていた。
そして、それを除いて、医療を受けられる施設は本土に行くしかなく、そこに行くまでに、優に半日は時間を費やすことになる。
「…エン、僕の身体はどれくらい持つ…？」
「さぁな…直ぐに治療が受けられれば何十年でもいけると思うけど、3，4時間以内くらいに受けられないとなると…保証はできないな…」
「…ということです、先輩…」
「だからって…」
「さっきの博士の攻撃で、僕は死んでいた…なら、ここでの足止めは僕の仕事です…行って下さい…」
「でも…」
「いいから、行って下さい！」
ジャンが、語気を強めて俺に言った。
「…わかった…」
「万一…生きながらえたら…連絡します」
ジャンはそれだけ言って、博士の気をそらすために、博士に向かって発砲した…。

脱出と決別

背後で、ジャンの発砲する銃声が響く中、エイダさんが確保していた退路へと、上がり始めた。
俺は、最後に一度、ジャンの方を向きなおしてから、ウェスカーさんに続いた。
「…コイツを、念のため残していくか？」
エンは、そういって、博士が使っていた端末を俺の方に差し出してきた。
「コイツには、まだ無事な医療設備のある部屋のデータを入れてある…使える可能性は低いけどよ？」
「無いより…ましか…？」
「まぁ、そんなところだな…」
そういいながら、エンは、博士の端末を使って何かを操作した後、その端末を破壊した。
「…なんで壊すんだ！？」
「端末情報自体を、全部、ジャスニールの端末に送ったのさ…まぁ、データの限界はあるけどな」
「…どういうことだ？」
「まぁ、簡単に言えば、今、この研究所の支配者は…ジャスニールって事だ…無事なら何でも出来るぜ？」
「全く…どうして、そういう端末操作の仕方を覚えられるんだ？」
「さぁな？…俺って、天才かもな…ハハハ」
「…ジャン…できれば無事でいろよ…」

退路である通風孔を抜け、その先では、既に出発準備が完了していたヘリが待機していた。
「ふむ…準備は大方終わっているようだな、エイダ？」
「ええ、その状態で呼ばないと、貴方は、文句を言うでしょ？」

そんな会話をした後、ウェスカーさんがこちらの方を向き言葉を発した。
「ここの研究所は、もう駄目だが…お前たちはこれからどうするつもりだ？」
「俺は…ウェスカーさんの下に行きたいのですが…」
「…お前なら、そういうと思っていたが…後悔しないな、クーパー？」
「じゃあ、俺も、ウィリアムについていくとするかな？急ごしらえの相棒だけどな！」
そんなやり取りの後、ウェスカーさんは極めて冷静な声で、
「ジョンソン、タイラント…君たちはどうする？」
そう、２人に問いただした。
「俺は…そのヘリには乗れませんね…傭兵稼業にでも戻ります」
ジョンソンがそう口を開いた瞬間、ウェスカーさんは、ジョンソンの前に駆け寄り、
拳を振り上げた。
「ならば、ここでのことと共に、消えてもらうしかないな…」
拳が振り下ろされる瞬間に、別の影が割って入る。
「…それなら、俺は、ジョンソンについて、傭兵稼業をやらせてもらおう」
タイラントが、ウェスカーさんの拳を片手で受け止めて、ジョンソンをかばう形になった。
「俺を担当する人間は、既に、人間ではないからな…ジョンソン、それで不満はあるかな？」
「…いや、無い…ありがとう…」
ウェスカーさんの突然の行動で、微動だにできなかったジョンソンはかろうじてそれだけを発した。
「ウェスカーさん！ちょっと、やりすぎでは…」
「不満があるなら…傭兵稼業を始めれば良い…クーパー…お前が来ようとしているところは、こういうところだ…覚えておくんだな」

「…わかりました…」
それだけ言って、俺は黙り込んでしまった。

タイラントの制止により、それ以上の攻撃などをウェスカーさんが加えることはなかったが、
ヘリは、2人を残して飛び立つこととなった。
「まぁ、仕方ないんじゃないのか？…ここでの情報が漏れたら、ウェスカーの旦那も、不利になるんだろうし」
「それだからといって…」
「何にせよ、タイラントとジョンソンとはここでお別れか…来てくれりゃ良かったのにな」
「…そうだな」
研究所のヘリポートに取り残され、遠ざかっていく2人を俺は見ていた。
「ウィリアム…お前は、ここの研究所の端末を今もっているか？」
エンが突然聞いてきたので、少しあせりながら、ポケットなどをあさってみた。
「あるにはあったが…動くかわからないぞ？」
「そうかい…まぁ、あれば何とかなる…かな？」
そういいながら、俺が手渡した端末をあれこれと操作して、一通り操作が終わったと思える動作をしたと思いきや、
その端末を、遠ざかっていく二人のほうに向かって放り投げた。
「お前…何を！」
「あの2人の脱出路確保さ…あの端末から、ジョンソンの端末にデータが転送される…まぁ、投げちまっているから、全部遅れるかはわからないけどな」
「…何にせよ…」
「やらないより、マシってヤツさ…実際、緊急時の脱出路確保なんて、この研究所には必要ないみたいだしな」
「…どういうことだ？」

「ヘリ、船以外にも、一時的なら、安全に退去できるルートが用意されているって言うわけさ…まぁ、偉い人にしかわからないルートらしいけどな」
「…偉い人にしか？」
「いま、あの研究所で一番偉いのは、ジャスニールだ…生きていれば、３人で無事脱出できる…そういう算段だな…可能性は低いけどな」
「…なら…俺は、３人が無事で…次に会うときは敵だったとしても…無事であることを願いたい…！」
「そう思うのは自由だろ？…俺も、あいつらとは、また会いてえしな」

ヘリは、研究所から遠ざかっていった…遠めに、端末を覗き込む、ジョンソンと、タイラントが先ほど抜けた退路を戻っていく姿が見えた…。
俺は、あの２人にとっては、裏切り者だろうか…。
いや、この研究所…アンブレラにとって、忌むべき敵になっただろう…。
しかし…それでも、あの２人と、ジャンの３人の無事を…ただ祈りたい…。
祈るだけなら…別にいいだろ？

エピローグ「残された者たち」

「仮に、ジャスニールのやつが生きてたとして…博士が生きている可能性って、どれくらいあるんだろうな？」
ジョンソンは、エンから受け取ることに成功したメールを見ながらタイラントに聞いていた。
『お前らが無事に帰還できる可能性は、ジャスニールが生きているかにかかわるぜ…。
どれくらい届くかわかんねぇけど…データだけは送っておく…また会おうぜ！』
その一文とともに、ジョンソンの下には、脱出経路や、それに関する情報の一部が届いていた。
しかし、エンが投げつけて、ギリギリで繋がった端末同士のやり取りだったため、
そのすべての情報が、届けられたというわけではなかった。
「さぁな…どちらにせよ、ジャスニールが生きていれば、俺たちの生き残る可能性が上がる…それだけだ」
タイラントは、ジョンソンからの問いにそう答えて、一呼吸置いた。
「博士が生きていたとしても…俺がどうにかする…いや、どうにかしなければな」
「その言葉…それが、一番頼りになるな」
そういいながら、タイラントとジョンソンは、先ほど抜けてきたばかりの道を戻りきり、
ジャスニールが博士を足止めしていたはずの場所までたどり着いた。
たどり着いた2人が目にしたのは、倒れて微動だにすることのない、博士だった化け物と、
その頭の辺りで、ウィリアムが先ほど使用して、その力を発揮したものの、結局、博士には効くことがないと思われた、

新作の武器を持つジャスニールの姿だった。
「あれ？2人とも、何で戻ってきているんですか？？置き去りにでもされましたか？」
軽口を叩くジャスニールの姿は、先ほどまで、瀕死だった姿と比べれば、顔色などは大分よくなっていた。
「…お前…その武器…」
ジョンソンは、かろうじてそれだけの単語をジャスニールにぶつけることに成功した。
「武器？…あぁ、先輩が持っていた武器です…エンから受け取ったメールの中に情報があったんですよ」
そういいながら、ジャスニールは使用が終わった武器を目線の高さ位まで持ち上げて、ジョンソンに見せてみた。
「しかし…さっき、ウィルが使って、もう使いものにならなくなったんじゃあ…？」
「なくなったのは、武器のエネルギーパック…なければ補充すればいい…といっても、この研究所の状態では、普通に探しても、そんなものは手に入らない…」
「じゃあ、どうやって…」
「エンが…この研究所のすべての機能を使える権利を僕に与えたとしたら…この武器で使う電力を失敬することくらいならできるということです」
ジャスニールが持つ武器からは、ケーブルが延びていて、そのケーブルは、ドア付近に取り付けられていた端末の接続口と直結されていた。
「ということは…？」
「さっき、先輩が使ったのと比べると、少し弱めなのかもしれませんが、今の博士になら十分な攻撃力を持って…倒しました」
「倒したって…さっきから何度も蘇っているような化け物だぞ！？」
「確かにそうです…なので、できれば、この場をすぐに離れたかったのですが…僕自身の治療しないといけなかったので…」

そういいながら、ジャスニールは、２人に端末を見せながら説明を始めた。
「エンが送ってきた、ここから１番近い治療可能スペースです…もっとも、簡易的な治療しか行えませんが、さっきよりだいぶ楽になりました」
「そうだったのか…それで、ここに戻って、武器を持っていた理由は？」
「…もちろん、蘇る可能性が十分に高かったからです…というより、その辺は、エンからのメッセージ通りの行動なのですが…」
今度は、エンから受け取ったというメールを開いた。
『足止めの役に立つ…ってか、あの化け物に手痛いダメージ与えられるのは、さっきウィリアムが使った武器があるんだけど、さっきので、内臓電池は空になっちまってんだよ…だから、簡単に使い方をかいておくから、研究所から電力盗んじまえよ！』
その文章の後に、ウィリアムが使った武器の使い方を簡単に記したファイルが添付されて、されに文章は続く。
『今、この研究所での最高責任者は、お前だ…ってか、人間がいないからな。
研究所からの脱出関係についても、お前以外できねぇ…簡単に書いておくから、化け物に手痛いダメージ与えられたら、
一旦治療でもして、気分がよくなったら、起爆装置の解除と博士が復活しないかをしばらく監視してから、脱出準備に入ってくれよ。
場合によっちゃあ、俺たち全員…もしくは、数人が、こっちに戻ってこなければならなくなるかも知れねぇからよ！』
「…ということです」
「…エンは、どこまで状況を読んで、この文を残したんだろうな…どう考えても、ウェスカーさんたちとの脱出で何かあると考えていたとしか…」
「エンは、特別製だったということだろう…それよりも、脱出の準備を始めなくていいのか？」

タイラントが、２人の会話を止める形で、先の行動へと促した。
「それもそうだな…ジャスニール…とりあえず、俺たちがエンから受け取った情報はこれだけだ…お前のほうで何とかなるか？」
そういいながら、ジョンソンは、ジャスニールに自分の持っていた端末を渡した。
「…あっ！僕のところに書いていなかった部分の情報が最初に書かれていますね…これなら、大丈夫だと思いますよ」
「そうか！…なら、さっさと、この研究所から出てしまおう」
ジョンソンとジャスニールがそんな会話をしている最中のことだった。

ピーッ！ピーッ！ピーッ！

ジャスニールの持っていた端末が通信を知らせる音を鳴り響かせた…端末上には、外部から「博士」宛ての通信が入っていることが示され、
現在位置から一番近い、外部との通信ができる施設の場所が映し出された…。

エピローグ「決戦に向けて」

なんとか、バリー達との合流を成功させた俺は、通信の時には言わなかった、ことを告白することにした。
「通信の時には、誰かが傍受している可能性があったから言えなかったんだが…」
「なんだ？…クリス、思わせぶりなことをいうじゃないか？」
からかうように、バリーは俺に言い返してきた。
「まじめな話さ…洋館の時に、殺されたと思っていたウェスカーなんだが…」
「生きていた…そういうこと？」
俺が言うよりも先に、言葉を挟んできたのは、ジルだった。
俺は、その発言に言葉を失い、黙り込んでしまった…その状況に一番の反応を示したのは、バリーだった。
「…そんなバカな！」
「でも…栗栖が黙るって言うことは、そういうことなんでしょ？」
「…そうだ…ウェスカーは生きている…」
ジルはその言葉を聞いて、首を振りながら答えた。
「ウェスカーは、私の目の前で、タイラントとか言う化け物に殺された…でも、今思うと少し違和感があったの…」
ジルの言葉をつなぐように、俺が言葉を続ける。
「ああ、確かに、殺されたはず…だった。だが、それはウェスカーが自分で殺させた…そういうことだ…」
「殺させた！？…何の目的があってだ？」
バリーが興奮したような口調で話に入ってきた。
「ウェスカーが、アンブレラの研究施設の一員で、あの事件に絡んでいることも、洋館の中の資料でわかった…そうすると、次に行き当たるのが…」
「…Ｔ－ウィルス？…まさか、ウェスカーは自分で！？」

ジルが行き当たった答えに、俺は黙ってうなずいてから答えた。
「自身に投与してから、あの化け物に自分を襲わせた…本来の目的を果たすためにな…」
「…本来の目的？」
バリーは、疑問だらけの顔でそれだけ言った。
「あいつの目的は大きく２つ…瀕死になって、力を得ることと、あの化け物のデータを手に入れること…」
「それには、俺たちのような、特殊部隊がうってつけだった…ってことか」
「あぁ…まぁ、結局、化け物は駄目になっちまったがな」
俺は、笑いながらそう答えた。
「それもそうだな」
バリーも笑いながら答える。
「で…別の話だ…これが、捕まっていたクレアが手に入れた資料と、俺が手に入れた資料をまとめたものだ…これを見てくれ」
「…『Ｔ－ベロニカ』？…新しいウィルスってやつか？」
「…あぁ…俺は、これを作って、自分自身に投与した人物を見たが、クレアの話によれば、他に２人投与されたらしい」
バリーは黙りながら話を聞き続けた。
「２人のうち、１人は製作者の父親で、もう１人は…クレアが脱出するのを手伝ってくれた青年だ…」
「そんな…」
ジルは、その話を聞いて、言葉を失うように、それだけ言って黙ってしまった。

「…その３人はどうなったんだ？」
沈黙を破るようにバリーが聞いてきた。
「製作者は…俺が倒した…残りの２人は、クレアが倒したのだが…青年のほうは、ウェスカーが連れて行ったらしい…」
「…なぜだ？」

「ウェスカーもほしかったのさ…『Ｔ－ベロニカ』を…本来なら、製作者を直接連れて行くつもりだったらしいが…」
「それがかなわなかったから、投与された人間を…？」
「そういうところだろう…目の前で、その２人が戦っているの見ていたが…生きた心地はしなかったな」
「でも、あなたは生きているじゃない…！」
黙っていた、ジルがそれだけ言って、再び口を閉ざした。
「そうだな…俺は、生きている！」

「…ところで、バリー…合流したのはいいが、お前のほうからの話というのは？」
「あぁ…そのことなんだが、実は、アンブレラとの内通者と昨日まで取れていた連絡が取れなくなっているんだ…」
「…どういうことだ？」
「内部にばれた…それが一番の原因らしいのだが…さっきから何度も連絡を入れているのだが、反応が全くない…」
「そうなのか…」
バリーのその言葉にあきらめかけていたときに、

ピーッ！ピーッ！ピーッ！

通信機から、受信の音が鳴り響き、バリーが慌てたように受信機を手に取り応答する。
「ジェームスか！？無事なのか！？」
バリーは通信の相手を確認するかのように大声で通信機に話しかけた。
『ジェームス？…あぁ、アレル博士の事ですか…そのとことも含めてお話があります』
バリーは相手側の予想外の返答に言葉を失ってしまっていた。
「あんたは誰だ？」

俺は、バリーが持っていた通信機を取り、相手に質問をした。
『私は、アレル博士の同僚の、ジャスニールというものです…アンブレラの人間…といったほうがわかりやすいですか？』
相手側のその返答に対して、俺は危機を感じて、通信を切ろうと思い、通信機を遠ざけた。
『…切るのは、少し待ってもらえますか？…とりあえず、私たちのほうも、少し困った状況になっています…』
「困った状況…？」
『えぇ…まず、そちらに、アレル博士と連絡を取っていた方がいるかと思いますが…アレル博士は、アンブレラに消されました』
「ジェームスが！？」
バリーが一番に反応を示す。
「お前がやったのか！…畜生！」
『…アンブレラがやったという点では、否定ができませんが…私たちは、アンブレラに切られた人間です…研究施設ごと…』
「アンブレラに…切られた？…施設ごとって言うことは…」
『すでに機能は停止しましたが、起爆装置も起動しました…博士は…ウィルスを大量に投与されて、人とかけ離れた化け物に…』
「ジャスニール…と言ったかな？…そういうことを話しては、問題なんじゃないのか？」
『…すでに伝えたとおり、アンブレラに切られた身ですので、お気にしないで大丈夫です』
「そうか…なら、その研究所について、もう少し詳しく聞くことも可能か？」
『聞かれるもでもないです…むしろ、協力を仰ぎたいので、その交換条件として、適切な取引材料になると言うなら…』
「なら、交渉成立だ…俺たちはどうすればいい？…君のいる研究施設まで行けばいいのか？」
『研究施設は…これから、爆破します…機密保持とかではなく…博士をとめなければならないので…』

その台詞に、再びバリーが言葉を挟んでくる。
「…ジェームスを止める…何があった…いや、どうなっているんだ！？」
『私は、博士に殺されかけました…仲間の助けもあって、今のように通信もできるようになりましたが…ただ、倒しても博士は死ぬことがありません…なので』
「研究所ごと…ということか…」
『…はい』
「戻れる見込みは…当然ないんだな…？」
『あそこまで変化した場合は、ほぼ不可能だろう…自身の意思とは、全く関係ない話だからな』
さっきまで通信していた人物とは違う人物が通信に入ってきた。
『突然すまないな…そちらの人間は知っている名前かもしれないが…俺は、『タイラント』だ』
その自己紹介に、俺たちは、互いに目を合わせて黙ってしまった。
『ウェスカーという男もこの施設に来た…そして、俺たちの仲間と共に、この施設を少し前に脱出したばかりだ』
さらに出てきた名前に驚きつつ、俺は、タイラントと名乗った人物に質問をする。
「ウェスカーがいた…時間がないと言うことか？」
『そう思ってもらったほうが良い…あの男が何をするかわからないが…仲間と再会するには協力者が必要だ…』
「わかった…君たちの言い分を全面的に信用するわけではないのだが…まずは、合流しよう…他に仲間はいるのか？」
『通信変わりました、ジョンソンです…こっちは3人で、これから研究施設の起爆をセット後、脱出の予定です』
「3人か…ウェスカーと脱出した仲間と言うのは？」
『ウィリアム＝クーパーと、知能の高いハンターで…今回の脱出の手引きをしてくれたのは、このハンターです』
「ハンターが脱出の手引き！？」

『えぇ…そのことについては、合流できてから、お話します…こちらで用意できる資料はすべて持ってから研究所を出ますので…』
「了解した…通信回線の番号はわかるか？」
『今使っている回線で問題がないのなら』
「わかった、しばらくは、この回線を開いたままにしておく…盗聴には気をつけてくれ」
『わかりました…では、合流の準備が出来次第、再度連絡します。』
そういって、相手側の通信が終了する音が響き、通信が途絶えた。

「…バリー…ひとつ良いか？」
「なんだ？」
「内通者だった人物は…ジェームス＝アトリアレルという人物で間違いないか？」
「…知っているのか！？」
「俺が在籍していた空軍でも、有名な人物だったからな…なんとなく名前だけは覚えていたんだ」
「そうか…なんにせよ、彼らが来れば、多少なりとも状況がわかるだろうな…」
「あぁ…」

本来の目的であったはずの、研究施設の崩壊…そして、かつての上司であり、策略を練っていた人物の名前が再び挙がる現実…。
まだまだ残され続けている、あまりにも強大すぎる敵にどう立ち向かうべきなのか…。
今は、パズルのようにばらばらに提供されている情報を少しずつ積んでいくしかない…それが、今の俺たちにできる最大限の抵抗なのだから…。

エピローグ「決戦に向けて」（後書き）

今回の話を持ちまして、とう連載小説は最終回となります。
最後までお付き合い頂きありがとうございました。

ちょこっと愚痴っぽい話とかにもなりますので読み飛ばして頂いて問題なしですが…。
本当は、もう少し早く終了の予定でしたが、広げすぎた風呂敷がうまいところまとまりませんでした。
実際、まとまったとは思えていませんが、終わることができたと言うことで、一安心です。
昔に書いて、誰が読んだのか？酷評を受けてでも、読んでもらいたい！とかって思いながら、投稿を重ねていくうちに、当初とだいぶ様変わりしてしまいまして…。
ながさもまちまちで読みづらいかと思いますが、
それでも、たくさんの方々読んで頂いて感謝です。

重ねてになりますが、長々とした文章、このあとがきと含めまして、最後までお付き合いいただきありがとうございました！
また、どこかで！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0475c/

アルティメットヒューマン

2010年10月10日17時06分発行